

の廊也。源氏に弘徽殿のほそとの
といへるたぐひなるべし。さやう
の所に局ツホ子したる女房のもとへ。
彼人にをぢらるゝ判官ゆけいの
すけなどのしのびり居たるがに
けなき事をいふ也

に、
彼檢非違使の袴のあらくしきさまなるへし
うちかけたるはかまなのをもたげにいやしふ、きらく
なといみしうたつきなしかたちよ

しけんもどをしはからるゝなごよ、
き君達のたんせうのひちにておはするいとみくるし 宮中將
關腋の袍の事にや 短く押わけで見立なきさま也 押縮て帳にかけたる也
わきあけにて、ねずみのおのやうにて わかねかけたらん程
などのさもくちおしかりしかな

ぞにけなき 夜行の人々也
やかうの人々なる、此つかさのほどはねんじて
念也思慮して

忍ひありきはやめよかしと也
とごめてよかし、五位の藏人も

五位の藏人も 六位藏人のみならず。五位ノ藏人は可レ然殿上人とはいへども猶かやらの忍ひありきは思慮すべき事ぞ
と也。職原抄云 五位ノ藏人三人 五位ノ殿上人ノ中ニ名家譜第 殊ニ撰ニ其器用ノ所補所也云々

人とあまたるて 清少こときの女房
達也

是より別の事也
ほそごのに人「ど」あまたるて、「ありくものごもみ」やすから

見やすからすよびよせて めやすか
らずと同心也。見にくき事也。彼
ほそどのゝ前行かふものどもに女
房の物いふは見よからぬ事なれば
見やすからずよびよせてといふ也

「よびよせて」ものなごいふに、きよげなるおのこ小舎人わ
「ら」はなご「の」、よきつゝみふくろ「なご」に、きぬごもつゝみ

て、さしぬきの「こし」なご「うち」見えたる、「ふくろに
「いりたる」ゆみ矢やたて「ほこたち」なごもてありく「を」、た

がぞとと「ふに」、
「いひ」て行「もの」

は「いご」よし、けしきばみやさしがりてしらすと「もいひ、
「き」もいれで「いぬるものはいみじ」ふぞ」にく「きか」し

「ものもいはても」
「う」

けしきばみやさしかりて やさしき
氣色にうちみなどして。只しら
ずといひて通るさまなり

ふくろにいりたるゆみ矢たてほこ
武官の人々の調度或は舞樂の道具
なるべし

むなぐるま 人ものらぬ車也。月夜には乗車にて月見ありくこそ然べけれむなしき車は似合ずと也拾遺集物名にむな車「鷹飼のまたもこなくにつなぎ犬のはなれていかんなぐるまつほど」

もてあそび うつくしみ愛しゐる事也

とのもりづかさ 御殿の掃除さしあぶらなどの役する女官也。前註。禁秘抄に云ク主殿司ハ美麗ノ姿也。公人ノ内ニ可レ稱ニ神妙ノ之職ニ云々 玄旨は女嬬をいふと云々

なりなとつねによくて 形ナリとよむ也こゝにては様子衣裳などよき心也

おもなきさましたる をもてづよく物にうてぬさまする也。若き物はうろくしげなるに。年老てさやうならぬ也

もたりて 持て也とのもりづかさのかほよきをむすめなどにもちてとの心也

からきぬなと 女孀も小袖に唐衣着る事禁秘抄に有

ひゞしくおかしき君達 君達とは攝關の御子息花族などを申す也

辨などは 辨官はおかしきよき官とおもへどもと也左右ノ大辨中辨小辨すべて七人あり。百寮訓要ニ云陣の右筆諸事奉行する器也。執柄三家の人などは近比いたくならず。但其例はおほし。名家の人儒家殊に執する官也

是より又にげなき物をいふ也
〔月夜にむなぐるまありきたる ぎよげなるおどこの、にく
妻持たる也
ひげぐるににくげなる人の年おひたる
人の子のわづか
が、物がたりする人の兒もてあそびたる
是より例の筆すさひ也
どのもりづかさこそなをおかしきものはあれ、下女のき
とのもりづかさほどなるはなしと也
は、さばかり浦山しき物はなし よき人にせさせまほし
さやうにかたちなどよ
からぬもよきにと也
〔つねに〕よくてあらんはましてよからんかし、〔年老すこしおひ
きわぎ也、若く、容貞よき也、かたちよく、よからんか、形ナリとよむ
なめり、若く、容貞よき也、かたちよく、よからんか、形ナリとよむ
なりなとよむ
さやうにかたちなどよ
からぬもよきにと也
〔つねに〕よくてあらんはましてよからんかし、〔年老すこしおひ

〔て〕、〔も〕からきぬなごいまめかし〔う〕てありかせはやとこ
男は召具する隨身がらこそ其さまもよけれき也
そおぼゆれおのこは又すいじんこそあめれいみじ〔う〕び、美々他
しれくしく、ろしからぬ心也
おかしき君達もすいじんなきはいとしら、し、辨
〔は〕いど、おかし〔く〕よきつかさ〔に〕おもひたれど、

て物の例古例など知て也〔なご〕しり〔て〕、〔お〕もなきさま〔した〕るもいと
似つかはしき也 見にくからぬ也
つきくし〔ふ〕めやすし、どのもりづかさのかほ あいぎ
やうづきたらん〔を〕、もたりて、さうぞく時にしたがひ
装束也
〔て〕、〔も〕からきぬなごいまめかし〔う〕てありかせはやとこ

〔は〕いど、おかし〔く〕よきつかさ〔に〕おもひたれど、
おかしき君達もすいじんなきはいとしら、し、辨
〔は〕いど、おかし〔く〕よきつかさ〔に〕おもひたれど、

おかしき君達もすいじんなきはいとしら、し、辨
〔は〕いど、おかし〔く〕よきつかさ〔に〕おもひたれど、

おかしき君達もすいじんなきはいとしら、し、辨
〔は〕いど、おかし〔く〕よきつかさ〔に〕おもひたれど、

おかしき君達もすいじんなきはいとしら、し、辨
〔は〕いど、おかし〔く〕よきつかさ〔に〕おもひたれど、

おかしき君達もすいじんなきはいとしら、し、辨
〔は〕いど、おかし〔く〕よきつかさ〔に〕おもひたれど、

したがさねのしりみじかくて、すいじん裾の事也の・なきぞいとわろ

きや

是より別の物かたり也立語也しきの御さうじの西をもてのたてじとみのもとにて、頭辨とうのべん

行成卿也ある女房と物かたりし給ふ也清少也の、人ど物をいとひさしうくいひたち給へれば、さし出

てそれはたれぞといへば、辨行成卿の答也 中宮の御方の女房也 清少の内侍なりとのたまふ、なに

かの詞也はさもかたらひ給ふ、大辨見えばうちすて奉りていな

ん物をといへは、いみじ行成也くわらひて、たれか行成の詞也 内侍と大辨とかゝること

忍びたる中の事を誰か清少に聞かせしと也をさへいひきかせけん、それさなせそとかたらふなりと

の給ふ、いみじ是より草子地也 清少と行成卿とを定りたる夫婦とにはあらぬとう見えきこえて、おかしきすぢなごたて

たる事はなく、只よのつね打あるかたうらひのやうなると也、たごありなるやうなるを、みな人さのみ

を見知ると也、猶おくふかき御心ざまを見しりたれば行成をほしりたるに、

めたる詞也中宮を申也へたらすなご御前にもけいし又さしろしめしたるを、つね

に、女はをのれをよろこぶものゝためにかほづくりす、士は

をのれをしれる人ものためにしぬと豫讓かいひたると也なんいひたるとい

しきの御さうじ 職御曹司 中宮職の事也。禁中にて中宮定子のおはす所也

頭辨 行成卿は一條院の長徳元年

八月廿九日補藏人 頭同二年四月廿四日任權左中辨 職事補任

大辨見えはうち捨奉りて 大辨は辨内侍が忍びたる男なるべし。今清少のいふ心は。行成のいかにむつましく語らひ給ふとも。大辨が見え來らば辨内侍は行成を打捨てゆかん物をとさかしらする也

それさなせそとかたらふ也 たとい大辨見えたりとも我を見捨そとか

たらふと左禮ての給ふ詞也 いみじく見えておかしき筋などたてたる よそめにもいみじ中と見え

て夫婦としかと見えたる事はなくとの心也 猶おくふかき御心さまと 行成の淺

はかならぬ心を清少の見知たればなべての人ならずと中宮へも申せしと也

女はをのれをよろこぶものゝこれ 豫讓が詞にて史記にあり。智伯といふもの豫讓をよく見知てめしつかひしに。趙襄子といふ者智伯をころしければ。豫讓が云。士爲知己者死。女爲己者死。今智伯知我。我必爲智伯報讎而死といひて。趙襄子をねらひて。終に死したる事也。

此事蒙求にも豫讓吞炭といふ所に委あり。それを清少に我懇志をいはんとて士はをのれをしれる人のために死ぬといふ詞を後にしての給へるなるべし

ひあはせ〔給〕つゝ〔申給ふ〕、〔ようしり給へり〕、
和名に遠江を止保太阿不三とをたあふみのはまや

いひあはせつゝ申給ふ 此古語男女の事に用ひてよくなひたれは今清少との中の事にいひあはせての給へりと也

とをたあふみのはまやなき 遠江の濱や無也。奥に遠江介則光といふ人を清少のかたらひし事あり。されば今行成卿のかくはの給へども。此遠江の濱あれば。まさに我にはうけひきがたしとの心にいふ也。濱やなきとははまやはなき。此はまあればとのころにや猶尋ぬへし

わかき人々は只いひにくみ 若き女房達など清少と行成との中をそねみにくむさま也

わかき人々はたゞいひに〔くみ〕、見ぐるしきこと〔ご〕もなご
つくろはずいふに、行成を若き人のそしる詞也此きみこそうたて見〔え〕にくけれ。こと

人のやうに〔ごきやうし〕、うたうたひ〔きやうし〕などもせず、
讀經

けすさまし 氣色の冷しく近付にくき心也。是も行成卿をそしる詞也

けすさましなごそしる、行成卿の事也女にももの給ふ事もまれなると也さらにこれかれに物いひなごもせ

たゞ口つきあいきやうづき 是より以下の人相はすなはち清少の様體をいへるなるべし

す、行成の詞〔女〕はめはた〔た〕さまにつき、眉はひたい〔さま〕に
おひ〔か〕り、鼻はなはよこさま〔に〕あり、愛とも、たゞ口つきあ
〔あ〕かり、鼻はなはよこさま〔に〕あり、愛とも、たゞ口つきあ

相ある事也
いきやうづきをそがひのした、くび〔なごおかしげにて〕、こゑ
〔きよけに〕

にくからざらん人〔の〕み、なんおもはしかるへき、其外の人相はかとはいひな

まはぬとはいひながら也
がら、猶かほ〔の〕いとにくげ〔なる〕人、は心うしとのみの給

へば、まして也〔い〕てをそがひほそ〔く〕あいきやうをくれた〔らん〕

人〔なご〕は、あちきなく也〔あいな〕かたきにして御前にさへ〔そ〕あし

まいてをそがひほそく 只にも行成をそしるにかやうにの給ふゆへまして願細く愛敬なき人は敵にしてそねむと也
御前にさへあしうけいする 中宮へも行成を讒する事ありと也。前に行成のことをしなべたららずなと

御前にも啓し。又さしろしめしたると書しは。こゝにて人々のいかに悪く申上ても中宮はうけさせ給ふまじき事をいはんとて也。しもなるをもよひのほせ。清少の中宮の御前にあらねば。よびのほせて申次せさせ給ふと也。

里なるには文かきてもみづからもおはして。清少の里亭にある比は行成の文にても頼み。みつからもおはして留守居などに申をかるゝ也。をそくまいらはさなん。清少此事を啓しに遅くまいらば。我さやうに申すと早く啓しに清少のまいるやうにせよと。留守居などに行成の給ふ也。

あるにしたがひ。さだめす。萬事あるにしたがひて用て。必と定めぬこそよき事に古より侍れば。我のみならずも申次せ給へと也。九條殿遺誠云隨有用之勿求ニ美麗云々。こゝは衣冠馬車の事な

「う・・・」けいする、句 行成の中宮へ申上る事あるにはもとより申次そめし物などけいせさせんごても、其はじめい

清少を頼れしと也
「さまに」
「ひそめ」
「て」し人「を」たづね、しもなるをもよひのほせ
清少の「つね

局に侍比は行成の來ても申次を頼まるゝと也
「ねにも」きていひ、里なる「に」は文かきても、みづからもお

はして、清少の里亭の人に行成の詞也をそくまいらばさなん申たるとまうしにまいらせよ

「な」ごの給ふ、清少の答也我ならずも其人あれはそれして啓し給へと也「其」人のさふらふ「らん」なごいひ「ゆい」つれ

と、行成承引なき也さしもうけひかすなごそおはする、清少の詞也あるにしたがひ、さ

だめす何事ももてなしたるをこそよき「事」に「は」す「め」れと

うしろみ聞ゆれどわがもとの心の「本性」ほんしやう「の上」ほんじやう「の」みみの給ひ「つゝ」

外の人に申次せんとはおもはずとの心也
あらたまらざる物は心なりとの給へばさてはごかりなしとは清少の詞也

「いかなる事」をいふにかさあやしがれば、行成のてい也「ならひつゝ」、中よ

の詞也
「なご」も「人」々「に」も「い」はる「か」う「か」たらふとなら

いかで行成に清少は恥て顔をも見せぬそ顔をも見せよと也
「何かはづる、見えなごもせよかしとの給ふ」を、清少の詞也いみしくに

の詞也
くげなれば、さあらん「人」はえおもはじとの給ひしにより

て、え見え奉らぬ「なり」といへば、行成の詞也けにくゝもぞなる、さ

らねど此遺誠の心にて。何事ももてなしたるこそよきにはすれといへる也
さてはごかりなしとは 彼論語に
過 則 勿 憚 改 といへるは
いかなる事ぞ。かやうの折こそ思ひ出給はめと也

さあらんはえ思はしと 前に行成の詞に顔のいとくげなるは心うしとの給ひし故也。さやうにくげならんは思はじとの給ひしゆへに見えまいらせぬと也
げにくゝもぞなる さやうに見にくゝはにくゝならんもあやなければ我に顔をな見えそと也

らはな見えそとて、自然清少を見給ふへき折にも也をのつから見つべきおりも、行「をのれ」か

成の目をおほひて見給はぬ也
ほ「を」ふたきなどして「まことに」見給はぬも、真心也眞實なるまごころにそ

心也
らごとし給はざりけりとおもふに、三月つこもり「比・冬」是「かたは」

より行成の事也
のなをしのきにくきにやあらん、うへの衣きぬかちにて「そ」殿

上のとのゐすかたもあり、つごめて日さし出るまで、式部のお

の女房なるへし
もどとひさしにねたるに、おくのやり戸をあけさせ給ふて、

一條院也
うへのおまへ宮の御前出させ給へ「れ」ば、清少と式部と也おきもあへずまご

冬のなをしの 直衣の色。夏より秋
は二ある花田色。冬春は白き櫻の
直衣等也。されは春着用し給ふを
も冬の直衣といふ也
うへのきぬかちにて、よのつねの束
帯には 袍フタに下襲ダイあり。是は袍
に下かさねを除て。指貫なるへ
し是を衣冠といふ也。今行成も此
装束なるへし
殿上のとのゐすかた 行成今頭ソツ辨
なれば殿上の貫首にて。とのゐし
給ふへし。とのゐすがたは直衣着
給ふ折もありと也

とのゐものも何もうつもれ フスマ 衾な
どおさめもやらず押埋れたるうへ
に。帝后おはしまして也

けしきなみせそ こゝにかく二所お
はします氣色を殿上人にしらすな
と女房に被仰也。いふ事をきこし
めさんとてなるへし
ふたりながらいざと 清少も式部も
御供にまいれと被仰也

なをめでたき事とも 帝后の御あり
さまのめでたき事を清少と式部と
いひあはせて也

ふをいみじくわらはせ給ふ、略禮義也からきぬを「かみ・かさみ」のうへ

にうちきて、句とのゐものもなにもうつもれながらあるうへに

おはしまして、陣也ぢんよりいでいるもの「なご」御らんず、殿上

人の露しらすで、帝后のおはすをしらす也 女房にたはるゝ也よりきて物いふなごもあるを、けしきなみせ

そと「わらはせ給ふ、帝后たちかへらせ給ふ也さてたせ給ふ」に、ふたりながら

いさとおほせらるれど 清少の詞也 奥にてすがほにて行成に見られ今かほなごつくろひ「たて」

し事をいはんとてなり
てまいらず、いらせ給ひて「後も」、なをめでたき事ごも「なご」

いひあはせてゐたる〔に〕、南みなみのやり戸のそばに〔に〕几帳の手也き帳のての

さしいてたるに〔さは〕りて、すだれのすこしあきたるより、

行成の袍の色也
くろみたるもの、見ゆれば、藏人など心やすき物なるへしのりたかゝるたるなめりと

なを事どもをいふに 猶よろつもの事

ともを式部と語ふ也。又直事也。ナチ

なをくしき事也。さしたる事もなき左禮事などなるへし

〔おもひ〕て、見もいれで、なを事どもをいふに、いと行成のよく

さま也
えみたるかほのさしいでたる〔を〕、〔なほ〕のりたかなめり、

それはといふ詞也 清少の見遣し也 のりたかならぬ也
〔そは〕とて見やりたれば、あらぬかほなり、あさましとわら

ひさはぎてき帳ひきなをしかく〔る〕れと〔は〕頭辨のに〔こそ〕おはし

け〔る〕れ、清少の心也見えたてまつらしとしつるものをといと口おし〔う〕、

もろともにあたる人は 式部が事也
式部はおくさまにむきてゐたれば
行成に顔も見せざりしと也

もろともにあたる人はこなたにむき〔てゐ〕たれば、かほも見

えず たちいでいみしくのこりなく顔を見しと也なごりなくも見つるかなどのたま

へば、清少の詞也のりたかと思ひ侍〔つ〕れば、あなづりてぞかし、など

かは見じこのたまひしに、さやうに也さつくくとはといふに、行成の詞也女はね

おき〔たる〕かほなんいと〔よき〕かたきといへば、ある人のつぼね

に〔ゆ〕きてかいま見と同かいはみして又も〔し〕見え清少の寝おきの顔のもし見えやするとと也やするとてきたりつ

なとかは見しとの給ひしに 我かほ
を見まじきといひながら。いかで
さやうにつらく見給ひしぞと也
前にさらばな見えそなどの給ひし
事あれば也

またうへのおはしつる折から 最前
帝のおはしつる折よりかくれるて
見しを。清少のしらざりしと也

つぼねのすたれうちかつき 清少の
局の内へも行成の入給ひしと也

るなり、またうへのおはしましつる折からあるをはえしら

さりけるよとて、それよりのちはつぼねのすだれうちかつ

きなごし給ふめりき

むまはいどくろきかたいさかしろき所などあるむら

さきのもん つきたる あしけうすこうはいのけにてかみおな

といとしろきけにゆふかみともいひつへしくろきかあし四

白きもいとおかし

うしはひたいはいとちいさくしろみたるかはしのしたあし

おのすちなとはやかてしろき

ねこはうへのかきりくろくてはらいとしろき

さうしきすいしんはすこしやせてほそやかなるそよき男は

猶わかきほとはさるかたなるそよきいたくこえたるはいね

ふたからんを見ゆ

殿上のなだいめん 花鳥餘情ニ云ッな
 たいめんは名調マイエツをいふ。殿上の御
 とのゐしたる侍臣等に名をよばれ
 て名の事也。此次に瀧口のと
 ゐ申あり。とのゐ申といふも名調
 と同じ也

ことねりわらはちいさくてかみいどうるはしきかすちさは
 らかにすこし色なるかこゑはおかしうてかしこまりて物な
 といひたるそろろろしき
 うしかひはおほきにてかみあらゝかなるかかほあかみて
 かどくしけなる

殿上のなだいめんこそ猶おかしけれ、御前に人さふらふおろ
 は、やかて問てすなはち名對面あり名調のために人々まうのほるさまなるへしやがてとふもおかし、あしをどごもしてくづれ出るをう

うへの御局の東面に 中宮の上の御
 局ツトテに清少などまいりて名對面
 をきくなるへし
 又ありともよくきかぬ人 日比さや
 うの人ありともよくしらざりし人の
 名のりをも也

への御つほねの「ひんかしおもてに」、耳をさへて也みゝをとなへてきくに、
 「車おりにて」忍ひてあひしる人の事也
 「ある」はふと「れいの」むねつぶるらんかし、又

ありともよくきか「ぬ人」をも、名調に耳をさへてきく時に也此おりにきくつけたら
 「せ」など

「はいかゞ」おぼゆらん、よき名悪き名也なのりよしあしきく「く」いひあ
 「おもふ」女とちさまく「しなど」

ふをきくといふ也殿上の名調はてたる也
 さたむるもおかし、はてぬなりとさきくほどにたきくちの弓弓絃

をならす也
 ならしくつの音「し」そゝめきいづる「に」、くらうき六位也藏人の「いみしく」

高くふみこほめかして、うしとらのすみのかうらんに、高欄藏人のさ
 たかひ

たき口の弓ならし 殿上の名調果て
 瀧口のとゐ申あるべきさまなり
 源氏夕顔卷に云かう申すものは瀧
 口なればゆつるつきくしくうち
 ならしてとあり。河海云ッ亥ノ一廻
 侍臣ノ名對面 延喜九年よりおこる
 同ッ亥ノ一廻ニ侍臣奏之。後瀧口ノ
 武士ノ名對面ノ事有

また人々さふらはねばにや 瀧口ども故障有て候せねば。名調仕らぬよしを奏する也

いかにととへばさはる事 いかで候せぬと藏人の問へは。其故障の子細を瀧口のことより申なるへし
まさひろは 源方弘 左馬ノ權ノ頭時明ノ男爲ニ 伯父ノ前ノ和泉守致明ノ子ニ號ニ源藏トイ文藏

君達のをしへければ 方弘は楚忽の人なれば。それは名調せずと教へば其故障の子細をもきかて必腹立べきと若君達のかまへてせし也

ま也
ざまづきと「かや」いふるすまゐに御前のかたにむかひて、う

しろざまに誰々か侍るとさふ「ほご」こそおかしけれ、「たか

く」はそ「うたかう」なのり、また人々さふらはねば「にや」な

だ いめんつかふまつらぬよしそ「う」するも、藏人のとふ也 いかにととへ

ば、瀧口の答也 さはることごも「申に」其故障の由を藏人きよとけて也 さきつてかへるを、まさ

ひろ「はきかず」とて、君達のをしへ「給」ければ、案のことく楚 いみじうは

忽に方弘の腹立也 解意のつみを勘る也 「うん」がへて「又」たきくちにさへわらは

る、是亦方弘か物かたり也 みづし所のおもの「だな」いふもの「に、沓をきて」イニはらへ

「へ」三字なし いひの「しる」を、方弘をいたはりて也 いとお「か」しがりて、たが沓にか

あらんえしらすと、りづかさ、人々「な」のいひける

を、漸也 や、人々はいひかくすに方弘 まさひろがきたなき物ぞ「や、其沓を方弘とりに來ても どり

猶きはかる也 みづからいひあらはす也 さはが「る」是より又にげなき物をいふ也 わかく「て」よろしきお「のこ」の、げす女の

名「をいひ」なれて「よび」たるこそ「いと」にくけれ、しりなが

らも、何「に」かや、其名のなかばは忘たるやうにいふはよしと也 「かたもじはおぼえでいふはおかし、み

みづし所のおものたな 御厨子所御膳棚。後涼殿の西の庇にあり。朝餉。朝夕の御膳などを供する所也。四位の殿上人別當たり。民部大輔五位を預とすと拾芥に有。凡河内ノ躬恒延喜の御厨子所の預なるよし家ノ集に見えたり
沓をきて 方弘か沓を楚忽に御膳棚に置也
はらへいひのしる 沓におもの棚けがれしとてはき拂ひ。誰わざそなど別當預りなどのしる也
いとおしがりてたか沓にか 主殿司など方弘をいたはりて。沓の主をいひかくしてしらすといふ也

よるなどそきおぼめかんはあしかりぬへけれど 夜は慥によぶべきなれば片文字は覚えぬやうならんはあしかるべし。然ともそれもみづからよばずとも。禁中にては主殿司其外の所にては侍か藏人所の者をしてよばせよかしと也。攝家などにも藏人所あれば也

はしたものわらはべなどは 是らは下すながら名をいひなれてよぶもよしと也

禁中に奉公の人の局に其下女をよるよふ時也
「や」づかへ所のつばね「なご」によりて、夜なごぞ「さおぼめか

んは」あしか「りぬ」べけれど、そのも「り」づかさ、さらぬと

ころ「にて」はさふらひ、「藏人ごころ」にあるものを「將行也つれ

ゆきて也」よばせよかし手づから「は」こゑもしるきに、はした

ものわらはべなごはされごよし

わかき人「ご」ちご「ご」もなご「は」こえたるよし、受領也國司也

おとなめきたる也 是もこえたる也
「た」る人はふごきいとよしあまりやせからめきたぬるもふつゝかなるそよき

よろづよりは牛飼童のなりあしくてもたるこそあれ 何よりも牛飼わらはの悪きを持こそ悪くあれと也
ことものどもはされどしりにたちて牛飼童ならぬものも悪きはよからぬど。それはあとよりゆくゆへ。苦しからずと也

くるきはかまのすそこなる すゝけてくるき袴なるへし。もとは末濃にて黒くすゝけたる也
かりぎぬは何もちなればみ 狩衣のえり袖なども着馴てしほたれしを着たるさま也
はしる車の方などに 車は走るに供はしづかにゆくか。しかも衣服も古めきたるは。やとひ人のやうにて我者とは見えぬと也

氣のいらちたる事也

るは心いられたらんとをしはからる、よろづよりは、うしか

ひわらはのなりあしくてもたるこそあれ、ことものどもはさ

れどしりにたちてこそいけ、牛飼童は車の前にある物なれば也、

きたなげなるは心うし、車のしりにことなる事なきおのこご

ものつれだちたるいと見ぐるし、細やかといふにおなし

んなご見えぬべきが、くるきはかまのすそこなる、かり衣は

何もうちなればみたる、はしる車のかたなごにのぎやかにて

やれなど時々うちしたれど 使人の
衣服イフクの破ヤブレたる事などは時々あり
とも着馴ナレてなりあしからず罪ツミなく
見ゆらんはさもあるべしと也

そこにある人として 其家につかふる
人として使者に見るにも。家など
の來ても。よき童のあまたあるは
よしと也
つちにおるものなとして 此詞心得
かたし字のたかへるにや多本を勘
へし

しつかに車に副ツクゆく也
うちそひたるこそわがものとは見えね、なを大かたなりあし
くても人つかふはわろかりき、衣類也やれなど時時うちしたれど、な
ればみてつみなきはさるかたなりや、此一段も使ひ童は清げにて有つかひ人などはあり
たき事をいふ也
て、わらははべのきたなげなるこそはあるましく見ゆれ、家に
に居る人にもおかしき童あ
るはよしとの心をいふ也
ゐたる人も、そこにある人として使つかひにても、まろうとなどのい
きたるにも、おかしきわらはのあまた見ゆるはいとおかし
人の家のまへをわたるにさふらひめきたる男おのこ、つちにおるも

さはきてたるも 髪さばきたる也て
は助字也

しもとだちたる物 櫛シボト 杖ツヅ 檜ヒノ
すは杖杖などをいふ也しもとめき
たる物也

車とゞめていだきいれまほしく 清
少の車をとゞめてかの子をいだき
いれたきと也前に人の家の前をわ
たるとある首尾なり

のなごして、おのことせの十はかりなるが、かみおかしげなる
ひきはへても、さばきてたるも、又いつゝ六つばかりなるが
かみはくびのもとにかいくゝみて、つらいとあかふふくらか
なるさしあけもちたる也ちこはあやしき弓 しもとだちたる物なごさゝげ
る・・・いとうつくし、車なごとゞめて いだきいれ
あそひたる

ほしく・・・こそあれ、又さていく行也に、たきもの香かのい
みまくほしく
みじく香のきこえし也前ニあせのかかへたるともありかへたる
うこそいとおかし
けれ、よき家の中

びらうげの車 前註

門あけて、びらうげの車のあたらしき也しろくうきよげなるはしす

はしすはうの下すたれ 端蘇芳下簾
したすだれのはしつかたをすはう
にそめたる也

はうの下したすだれのは色よきこゝろ也ひいときよらげにて、榻なりしぢにたちうち

かけ たるこそめでたけれ、五位六位などの下がさねの裾を帯しり

にはさめる也
はさみて、さゝのいとしろきかたにあふきうちをきなど

つばやなぐひ 壺胡録 平胡録と
てあり。矢をいる、物也

して、どかくいきちがふに、又装束さうぞくし、つばやなぐ

くりや女 厨女 みづしをんなをい
ふなるへし

ひお負也ひたるすいしんの出いる入したるいとつきくしくりや女

なにかしとのゝ人やさふらふ それ
どのゝ人とよび尋るさま也

のいときよげなるがさし出て、なにがしどのゝ人やさふ

らふなごいひたるおかし
も

たきは

音無の瀧 山城の北大原にあり
ふるのたき 布留瀧大和にあり
法皇の御覽しに 宇多、法皇か花山ナ

をとなしの瀧 ふるの瀧は法皇の御らんしにおはしましけ

那智ノ瀧 紀伊國也

んこそめでたけれ なちのたきはくまのあるがあありとぎくかあ

とどろきの 轟瀧 奥州にあり

はれなる也 とどろきの瀧はいかにか轟くといふ名のつきてなりかましくおそろしか

らん

川は 一本此一段奥の人の家につきくしき物の次むまやはといふ前にあり

飛鳥川 大和也 古今云「世の中は何か常なる飛鳥河きのふの淵ぞけふはせとなる。此歌の詞にてかけり

いづみ川 泉川 大和也童蒙抄ニ云ク

いづみ川とは崇神天皇の官軍更那羅山をさけて。進みて輪韓河に至て。武恒安彦河を挾ていさ

みて各相挑。故に時の人其川を改て挑川といふ。今泉川といふは訛也委日本紀

ぬき川 梁塵愚案抄ニ云ク 美濃の國に伊豆貫川といふ所あり。伊豆を略していへり

さいはらなどの 貫川も澤田川も催馬樂の律のうたひ物なれば也。梁塵愚案抄云。催馬樂は昔諸國より御調物を大藏省へ納し時民の口ずさひにうたひける歌なれば催馬樂と名付る也。馬を催すとかけ

あすか川ふち瀬〔も〕さだめなく〔は〕かなからむ〔と〕いど〔あ〕は

れなり 大井山城也 おほる川 〔いつみ〕川 〔おどなし〕川 水無瀬山城也 耳敏河山城也 拾芥 又

〔も〕なにしを 〔さしもさかしく〕きけんとおかし 〔をどなし〕

川おもはずなる名とおかしきなり 〔ほそたに川〕 〔たまほし〕

〔細谷川〕 〔いつ〕ぬき川 〔さばだ川〕 〔などは〕 さいばら

などのおもひはするなるべし 〔なのりその川〕 〔なとり川〕

〔も〕いかなる名をとりたる 〔にか〕ときかまほし 〔よしの川〕

るは御調物を負る馬をかり催す心也

なとり川 名取河 奥州也

このしたにもある也 此下界 河内

國交野の南枚方の北にあり

七夕づめにやどからんと 古今羈旅

云惟高のみこのとも狩にまかりける時に。天の川といふところの河のほとりにありて。酒などのみけるついでに。みこのいひけらく狩して天の川原にいたるといふ心をよみて盃はさせといひければよめる在原業平朝臣「狩くらし七夕づめに宿からんあまのかはらに我はきにけり 伊勢物語にもあり七夕づめとは七夕妻也と牡丹花の聞書にあり

雲漢詩折木爾雅 あまの川〔ら〕 〔このしたにもあるなり〕 七夕づめにやどか

らんと、なりひらが よみ〔けん〕も〔まして〕おかし

〔あかつき〕にかへらん人はさうそくなといみしううるはしう

るほうしのたりとゆひかためすともありなんどこそおほゆれ

いみしくしとけなくかたくなしてなをし狩衣なとゆかめた

りともたれかみしりてわらひそしりもせん人はなを曉のあ
 りさまこそをかしようもあるへけれわりなくしふくにをさ
 かたけなるをしゐてそのかし明すきぬあなみくるしなど
 いはれてうちなけくけしきもけにあらず物うへもあらんか
 しとみゆさしぬきなともぬなからきもやらずまつさしより
 てよはひつることのなこりめのみゝにいひいれてなにわさ
 すともなきやうなれとおひなとゆふやうなりかうしおしあ

けつまごある所はやかてもろともにおていきてひるのほと
 のおほつかなからんことなどもいてにすへり出なんは見お
 くられて名残もおかしかりなんとおもひて所ありていときは
 やかにをきてひろめたきたちてさしぬきのこしことくとり
 はゆひなをしうへのきぬもかりきぬ袖かいまくりてよろ
 とさしいれおひいとしたゝかにゆひはてゝつゐはてゑほし
 のおきとつよげにゆひいれてかいすふるをとしてあふきたゝ

うかみなどよへまくらかみにをきしかとおのつからひかれ
 ちりにけるをもとむるにくらければいかてかはみえんいつ
 らくどたきわたしみいてあふきふたくどつかひふ
 どころかみさしいれてまかりなるとはふりこそいふらめ

はしは

あさむつの橋 長等橋 津國也 未勸 あまびこの橋 濱名 遠江也

ひとつ橋

うたねの橋

上野也 舟橋 嵯峨の歌結の橋にや可尋之
 うたじめ橋

あさむつの橋 催馬樂に淺水とあり
 愚案抄に飛彈にも越前にも名所に
 入云々
 ひとつはし 津國也難波わたりの一
 橋とよめり但非二名所一歟 獨梁
 和名ヒトツハシ

をがはの橋 小川橋 新撰名所集に
 陸奥とあり。八雲御抄には筑柴と
 云々

かけはし 梯 史記 棧 漢書 漢書

かさぎのはし 八雲抄天の川也云
 棧道今謂之關道

々。淮南子鳥鵲填河成橋ナ
 度ニ織女云々

ゆきあひのはし 是もかささぎの橋
 と同。孫姬式云 銀 漢 鵲之會

やますげの橋名を聞たるおかし 山菅の橋一すちわたしたる棚橋心
 せばければ名を聞におかしき也云

とをちの里 大和の十市里にや。一
 説八雲御抄云とをちの里は只遊
 事也狭衣に嵯峨をとをちのさと
 よめり

八雲に大和とあり
 ざろきのはし をかはの橋 かけはし せたの橋 木曾路の
 八雲津國云云 八雲に下野云云 勢多 近江也 信濃 ち

はし 八雲津國云云 八雲に下野云云 せたの橋 木曾路の
 八雲に大和とあり をかはの橋 かけはし せたの橋 木曾路の
 はをつの浮橋とあり 八雲に下野云云 せたの橋 木曾路の
 うきはし 八雲に下野云云 せたの橋 木曾路の

の橋 八雲に下野云云 せたの橋 木曾路の
 きくにおかしきなり せたの橋 木曾路の

里は

あふさかの里

八雲近江云云 八雲にもいづくともなし 未知 いさめの里 八雲にもしれ
 ながめのさと

信濃也 丹後也 夕日の里 八雲大和云云 八雲にもしれ
 たのめの里 丹後也 夕日の里 八雲にもしれ

ふしみのさと 井蛙抄ニ頓阿云々後拾遺ニ「都人くるればかへるとよめるは山城の國也。菅原や伏見ノ里は大和也 ながみのさと 八雲ニ云ク大和。攝津にもあるか

伏見のさと ながみの里

八雲にも其國見えす つまどりの里、人にとられたるに

やあらん、我とり・まうけたるにやあらんいづれもおかしおかし

しみのさと あさかほの里

草は

さうぶ こも あふひいとおかし、まつり祭のおり神代よりして

さやうのかさしと也 さるかさしとなりけんいみじふめでたし、二葉にはへてやさしものゝさまもい

き物なれば也 とおかし おもだかも名のおかしき也、心あがりしけら

さうぶ 菖蒲也 とも 蔣童蒙抄 菰和名 あふひ 葵也。二葉草 もろ葉草ともいふ也。賀茂の神山などに生て御形の日の神事に用ふる也世に向日葵などいひて花をもてあそぶ草とは別也 おもたか 澤瀉也 心あがりしけんとおもふに 面高といふ故心あがりしけんと思はれて其名面白きと也。曲禮ニ曰ク凡ク視

上ニ於面則敷 註ニ 呂氏曰 上ニ於面ニ者其氣驕知ニ具不ニ能ニ以下

みくり 八雲に實九里云々和名云三稜草ミクリ

ここに 源氏宿木卷にこだになど引とらせ云々。河海に木蝸蕒の類也云々。古今の物名に「ちりぬれはのちはあくたにとよめるは苦丹とかけるを。飛鳥井ノ榮雅のこだに」と同前の由の給へり あやふ草はきしのひたいに 朗詠云 スレハナノヒタヒニタルチ 観レ身岸 額 離レ根草

んどおもふに みくり 蛇床子延喜式 ひるむしる 苔 こけこだに 雪ま

のイわか草あを草 酢漿和名世にすひ物草といふもの也 わか かたはみ、あやのものにて したに ある も、

ことものよりはおかし 危草といふなるへし あやう草はきしのひたいにおふ

らんもげにたのもじけなくあはれなり からす八雲に壁に生云々 いつまで草はお

ふる所いと 壁に生るは岸に根をはなれたる はかなくあはれ也、岸きしのひたいよりもこれはく

たよりはあやうしと也 石灰 白壁の事なるへし げなりまことのいしばいなごにはえおひすや

あらんとおもふそわろき 事なし草は思ふことなきにや をなす

事なし草 河海忍草の一名の由見ゆ 此枕双紙には此次に別に忍草を出されたれば又一種あるにや尋ぬべし

しのぶ草 童蒙抄ニ云「獨のみながめふるやの妻なれば人を忍ぶの草ぞ生ける六帖にあり。忍ぶとは垣衣とかけり。苔の類也宿の軒垣などに生る也

つはな 芽花 浅茅の花にや。童蒙抄にあさちと同所にあり。八雲にはちばなとあり

まるこすげ うき草 イ本此次にこまあられさゝたかせとあり次の歌の題はといふ所に書べきを衍文なるへし

ならしは 檜柴は木也別になら芝などいふ草あるにや尋べし

〔あらん〕とおもふもおかし 〔又あしき事をうしなふにやとい

づれもおかし〕 垣衣和名一名鳥韭云々 軒端の事也 屋のつま、さ道芝いとおか

し出たる物のつまなどに、聊なる所にしみて生たれば云也 物のはしつかた也 聊なる所にしみて生たれば云也

おかし 芥文集蓬同 〔いみしう〕おかし 〔つばないとおかし〕はま濱茅

ちの葉はましておかし 荊三稜 葉よろつのくさよりもすくれてめてたし

ををつらら 木賊 ちの葉はましておかし 荊三稜 葉よろつのくさよりもすくれてめてたし

らんどおもひやられておかしけれ 花は佛にたてまつりみはすゝにつ

おほきなるとちいさきと 杜子美詩

點レ溪 荷葉 疊ニ青錢一といへる風 情にや イ本蓮は萬の草よりも世にすぐれめでたし。妙法蓮花のたとひにも。花は佛に奉りみはずに

ひかげ 花鳥餘情云。日蔭草をはさがりこけともいふ。和名ニ云蘿ヒカケ 女羅也云々

はまゆふ 童蒙抄云。濱木綿とは芭蕉に似たる草のみ熊野の濱に生る也莖の皮のうすくておほくかさなると也人丸も浦のはまゆふもへなるとよめり

かし 愛らしき心也 是すのうき葉のらうたげにてのどかにすめる池のをも

らぬき念佛して往生極樂の縁とすればよ 又花なきころ みにてに、おほきなるとちいさきとひろごりたゞよひてありくい

りなる池の水に紅にさきたるもいとおかし翠翁紅とも詩に作

とおかし、さりあげて物をしつけなごして見るもよにいみじ

りたるにこそ からあふひひのかけにしたかひて 助字也 八重葎

うおかし やへむぐら 山すけ やまる ひかげ はまゆふ

こそ草木といふへくもあらぬ心なれ さしもくさ 八重葎

あし 葛の風に ふきかへされてうらのいとしろく見ゆる

つきくさ うつろひやすなるこそうたてあれ

おかし

古萬葉集 萬葉集の事也。清輔袋双

紙ニ云ク此集ヲ末代之人稱ニ古萬葉

集ト源順集にも古萬葉の中にと云

事あり。是有ニ新撰萬葉集 若 菅

家萬葉集等ニ之故歟 新撰萬葉集は

延喜御時抄ニ出之ニ云々。五卷也。又云萬葉撰者或稱ニ橋大臣 諸兄或稱ニ家持ニ云々

古今 むかしは本々さまたらざるを定家卿貞應嘉祿の奥書の兩本を證本に定させ給へり。中にも貞應本を二條家には用

らる。延喜の御時貫之以下四人の撰勿論也

後撰 天曆五年十月梨壺五人撰之。此本も朱雀院の塗籠の本。範永の青表紙の本などありしかど定家卿の貞應二年の

本天福二年の本等を證本と用ゆ。袋双紙云嶋守遺高云。古今後撰拾遺を號ニ三代集。以往相ニ加萬葉集ニ號ニ三代集ニ而

拾遺出來之後 棄ニ萬葉集ニ用ニ拾遺ニ云々略記

歌の題は よのつねの題のみならず

隠題 によむべき物とも見ゆ

くず 葛也

こま 駒也

あをつゝら 青鞭草

〔集は〕

古萬葉集

古今

後撰

〔歌の題は〕

みやこ

くず

みくり

こま

あられ

さゝ

つほすみれ

ひかげ

こも

たかせ

をし

あさぢ

しは

あをつゝら

なし

なつめ

あさがほ

草の花は

なでしこからののはさら也、やまどのもいとめでたし をみな

なでしこからののはさら也 唐撫子

をみなへし 女郎花文集女倍之新撰

萬葉 菊の所々うつろひたる 古今集秋下

平貞文 秋をよきて時こそ有けれ

菊花うつろふからに色のまされは

りんたう 龍膽也。古今の物の名に

花ふみちらす鳥うたんとよめり。

基後の悦目抄に「りんたうの花を

手向るき法師の經よむこゑはたふ

とかりけりと誹諧歌によめり

へし

きさきやう

菊のどころくうつろひたる

かるかや

きくつほすみれ

りんだうは枝ざしなごもむつかしげ

れとこと花

とももの

みな霜かれ

はてたるに、いと花やかな

る色あひにてさし出たるいとおかし 又 わざととりたて、

かまつかの花 すなはち此草紙に鷹の來る花と書よしいへり。世に鷹來紅といふ物にや

人めかすべ〔き〕もあらぬさまなれどかまつかの花〔愛らしき義也〕らうたげ〔く〕

也名〔ぞ〕うたて〔げ〕なる、かりのくる〔はなご〕もじに〔は〕か

かにひの花 古今の物名にあり。雁緋也よのつねのがんひは藤にも似ず春秋にもさかず。但異本ニかるひの花とあり是は鷹緋にはあらで別の物にや

きたる 〔ゝる〕かにひの花色はこからねと藤の花〔に〕いとよく似

しもつけのはな 花うす紫にてこでまりに似たり。拾遺の物名に「植てみる君だにしらぬ花なれば我しもつけん事のあやしさとよめる物也

て、はる〔と〕秋とさく〔か〕おかし〔げ〕なり〔つぼすみれすみ〕

にくきみのありさま 夕顔の實は瓢也。なりひさこといふ物なり

れおなじやうの物ぞかし〔是より以下義通せず他本を見合すへし〕おいていけばおしなごうし しもつ

夕がほはあさがほに似ていひつゞけたるもおかし

けのはな 夕がほはあさがほに似ていひつゞけたるもおかし

おしけれなごてさはたおひ出けん〔粹の事にや〕かつきなごいふものゝや

かりぬべき花のすかたにて、にくきみのありさまこそいと口

見てくらなとに 御幣也〔ミテクラ〕芦の花のさま御幣に似たればなるへし本語あるか可勘

うにだにあれかしされど猶夕がほといふ名ばかりはおかし

もじもすゝきには 文字なりも芦と薄とをとらぬと也 〔イ本もえしもすゝきにはとあり萌出たるかたちの薄にをとらぬと也〕

あしの花さらに見どころなけれど、見てぐらなといはれた

をどらねど水のつらにておかしうこそあらめど覺ゆ 〔此草花のこれに〕

る、心ばへあらんとおもふにたゞならず、もじもすゝきには

中に薄を書くはへぬとの事也 〔すゝきをいれぬいとあやしと人いふめり、秋の野のをしなべ〕

たるおかしさはすゝきにこそあれ、ほさきのすはうにいとこ

ほさきのすはうにいとこき 穂の色の蘇芳に染しやうなる也。是をますうのすゝきといふ也

たるおかしさはすゝきにこそあれ、ほさきのすはうにいとこ

カインモトノシヤウビハテニッ
階 底 薔 薇 入レ夏開

の木也
 しなごのつらにみたれさきたる夕夕映夕榮ばへ夕に色のます也ほさ
 り 秋の野のおしなへたるおかしきはすゝきこそあれ ほさ
 きのすわうにいとこきかあさきりにぬれてうちなひきたる
 は さはかりのものやはある 秋のはてそいど見所なき色々
 に見たれさきたりし花のかたちもなく 散りたるに冬のすえ
 まてかしろのいとしろくおほとれたるもしらすむかしおも
 ひいてかほに風になひきて かひろきたてる人にこそいみし
 うにたれよそふる心ありてそれをしもこそあはれとおもふへ

けれ

集は 古萬葉 古今

歌のたいは 宮こくす こま あられ

おほつかなき物

おほつかなき物 物の分明ならず心
 もとなき心也
 十二年の山ごもりのほうしのめおや
 後撰集十ノ詞書に 男のほど久しう
 ありてまうできて。御心のいとつ
 らさに。十二年の山籠りしてなん
 久しうきこえざりつると云々。比
 叡山などに禁足してこもる事也。
 此草紙の心は山法師の久しく禁足
 してあるに。父は行ても相見るべ
 きを。母は登山かなはねば。十二
 年のほど尤おほつかなかるへし
 やんことなき物もたせて 無止ヤン

十二年の山ごもりのほうしのめおや しらぬ所にやみなるに
イニゆきあひたる
とあり可用歟
 行たるにあらはにもぞあるとて火をもどもさでさすがに
しらぬ人々に火あかくてはあまり
顧澄ならんとて態火ともさて也
並居也
 なみわたる 此比來たる從者の事也
 いまいできたるものゝ心も知ぬに やんごとな

トナキ 江次第ニ書リこゝは大事に
おもふ物を持せて他所へやりし也

き物もたせて人の「がり・」やりたるにをそくかへる もの
「もとに」

「もまた」いはぬちごのそりくつがへり「て」人にもいだかれず
反覆也

人のかほ見しらぬ物見 祭の供俗人
なども見知てこそは一入おもしろ
かるべければ也

なきたる 「くらしきにいちごくひたる 人のかほ見しらぬも
うつくしき色も見えねは也

の「見」

たとしへなき物 たとへむかたなくかはりたる心也

夏と冬と よるとひると 雨ふる「日」と「日」てる「日」と

「わかきと老たると」人の笑ふとはらだつと 「おひたる」と
「あ

かきと「しろきとしろきと」思ふ「人」とにくむ「人」と「あ
黄檗
ゐどきはだど 雨と霧と」おなじ人ながら「も」心ざし「あるお
る」かはりたるをり「はまことに」あらぬ「人」をぞおぼゆる「か
りどか

あめと霧 イ本此次に 火と水と 肥
たる人と やせたる人と 髪長き
人と みしかり人とあり
おなし人なからも心さしうせぬるは
白氏文集大行路に人ノ心ノ好悪 苦
スナラヨミスレハシナニクミスレハカサ
不レ常 好 生ニ羽毛 一 悪 生レ瘡
又云 妾顔未レ改 君心改又云 君
不レ見 左納言右内史朝 承レ恩暮
タマフチ 賜レ死行路難不レ在 水 不レ在 山
只在 人情反覆間 一といへるさま
に似たり

いねさはかしく いねわるき事也
イニいねさかなくとあるもおなし

忍ひたる所にては是より 又別の事
の鳥の興ある事をいふ筆すさひ也

「し」く「おちまごひ木づたひてねを」ひれ「たるこゑになきたる
ねまとひし也
「き」
「人」を「夜」からす「とも」の「ね」て、夜中はかりにいねさは「か
「は」

こそ、ひるの「見」めに「は」たがひておかしけれ「しのひたる所
鳥のひるのさまとたとしへなき心也 人に忍ひて逢た

る所也
〔あり〕ては夏こそおかしけれいみじく〔う〕みじかき夜の

〔いどはかなく〕あけぬるに、つゆねずなりぬ、やがてよろ

づの所あけながら〔な〕れば、涼し〔う〕見〔え〕わたされた〔り〕

猶いますこしいふべき事のあれば、たかひにむつことのさしいらへかた見にいらへ〔ごも〕す

する也
るほごに、たゝゐたる〔まへ〕より、イラへからすのたかくなきて

〔い〕くこそ〔いど〕あらはなる事也けせうなる心ちしておかしけれ〔又〕冬の

〔夜〕いみじく〔う〕寒さむきに〔おもふ人ど〕衾にまつはれて也うつもれふしてきくに、

冬のいみしく 前に夏の夜の事をい
ひたればこゝは又冬の事をいふ也

かねのをこのたゞ物ふすまのうちにてきくゆへ也のそこなるやうに聞ゆる〔も〕おかし、
いど

鳥のこゑもはじめははねのうちに〔なくか〕口をこめながらな

けば、いみじう物ふかくとをきが、〔つぎ〕になるまゝに
あくる・・・

こゑのあさやかなるをいふ也 懸想 我に心をかけてきたる人也
ちかくきこゆるもおかし けさう 〔の〕人にてきたるはいふべ

きにもあらず、たゞうちかたら〔ひ〕ふも、又さしもあらねごをの

づから來也きなご〔も〕する人のすのうちに〔てあまた〕人々〔あま

たありく〕物なごいふに〔あ〕いりて、とみ〔に〕歸りげもなき

つき／＼になるまゝに 次々也世に
一番鳥二番鳥といふ次第／＼也
けさう人にて 此段は供なる人の心
なきをつれましき事をいふに。懸
想人の供の心なきは勿論。只かた
らふ人などの供の心なきもわるき
事をいふ也

すのうちにてあまた人々 清少は簾
中にて女房とち物がたりするに。
彼來たる人も入て頓トミにも歸るけし
きなげなる也

をのゝえもくちぬへき 河海云 六帖一をのゝえはくちなば又もすげかへんうき世の中にかへらずも哉 晋の王質が石室山にいたりて一局の碁を見るほどに。斧の柯の朽たりし事也。述異記に委ながやかにうながめて をのゝえも朽ぬべしと詠吟せし也 イホうちあくびては長あくびする也

彼來たる人の供也イおのこわらはなどのそきけしき見るにをのゝえもを、ともなるおのこわらはなご

どかくさしのそきけしきみる

に、をのゝえもくちぬべきなめりど、

不請がるさま也 密也をのれはひそかにいふと思ふらめともこなたへ聞ゆると也

ればながやかにうち

ながめて、

みそかにごおもひていふ

らめごも、

供の者のいふ事也 煩惱 苦惱也

いまは夜

中にはなりぬらん、

なご、

いひたる、いみじう心づきな

か、のいふものはご

か、くも、

か、くも、

を具せし主人こそ也

日比此人をおかしと見聞し興もさむると也

つる事もうするやうにおぼ

又さはいろにいでゝはえいはず

やうに我らは煩惱苦惱など詞に

いでゝはえいはずとおとなしやかにいふ也。是もいはぬやうにてあてゝいふ詞也

したゆく水のと 六帖「心にはした

ゆく水のわきかへりいはで思ふぞいふにまされる此うたはならの帝

盤手といふ鷹を愛して大納言にあづけさせ給へるに大納言其たかを

そらしてえ尋出ざる事を奏し申されれば。帝物もの給はせ給はで

「いはておもふそいふにまされるとの給ひしに後人上ノ句をさまくつけたるらし大和物語にあり

すいがい 透垣也

あまたあらん中にも あまた下人あらん中にも。さやうに心なき者にはあらぬを心ばへをよく見て召つれありくべき事ぞと也

あまたあらん中にもこゝろはへ見てぞ

是も供人の詞也

ゆれ又さは

いゝろにいでゝはえいはずあるとたかやかにう

とおもふさまなるへし 清少の心也いはぬは猶いふにまさるものと也

ちいひうめきたるも、

したゆく水のといとお

か、し、たてじ

とみすいがい

のものとにて、

是も供人の主ををどろかし催す詞也

たるも

い、

よき人

の御とも人などはさもな

こそさやうにはあらね、たゝ人なごさぞある

只人の供はさやうに心づきなきと也

欽定
四庫全書
子部
春曙抄

卷
四

三三三

春曙抄卷四

ありかたきもの

しうどにほめらるゝむこ 又しうどめにおもはるゝよめのき

み ものよくぬくるしろかねのけぬき 人

の す て、 あ る ほ ご い さ ゝ か の き す な き 人 お

な じ 所 に す む 人 の、 か た み に は ち か は し、 い さ ゝ か の 隙 な く

心づかひする也 心 づ か ひ す る 也
よういしたりと思ふがつるに見えぬこそかたけれ 心 づ か ひ す る 也
實に有がたけれといふ心也 心 づ か ひ す る 也
物語しふ 心 づ か ひ す る 也
油断なく 心 づ か ひ す る 也
集也 心 づ か ひ す る 也

しうどめにおもはるゝよめのきみ
莊子か外物篇に婦姑勃磈とい
へるに似たり唐夫人の姑に乳をふ
くめしたぐひ。誰もこひねかふべ
き事也
おなし所にすむ人の 人馴てはをの
づから敬の心をとろへてたがひに
恥る心なくなる物なれば也論語に
晏平仲善與人交。久而敬
レ之と孔子のほめ給へる。まこと
にありがたき事なるべし。佛道に
も 慚愧は衆善之衣服といへり。
ハツルハツル
慚はみづから恥て悪行をせぬ也。
愧は他人をはちて悪事をやむる心
也。人として此慚愧の二法なくは
世間は父母兄弟妻子もなく知識尊

長大小の分ちもなくて畜生と同等也と經に説り

男も女も法師も契ふかくて 男女の中にかきらず法師もよく契りかたらふを和合僧といへり。大和物語にのうさんの君といひける人淨藏とはいとになう思ひかはす中なりけり。かぎりなく契りて思ふかたをもいひかはしけり云々

かいねりうたせたるに 源氏末摘花にかいねりこのめるとあり。河海云 搥練は両面ふくき張にて中重なし。紅色也。玉葛卷の河海ニ云打殿張殿などてあり。男女の装束。うちのり本體也。板びきのりなどは略儀なり云々

ほそどの 細殿 河海 三光院御説 廊ホットとよめり。舊記に 廂をホットと點す是も其心歎前註

なごかきうつす〔本〕ほんにすみつけぬ有かたしと也事よき双紙などは

いみじ〔う〕心してかけど〔も〕必かならずこそきたなげになるめれ 男

〔も〕女〔を〕は法師も〔は〕し女〔ち〕ぎりふかくてかたらふ人の末ま

で中よき〔人〕事かたし〔つ〕かひよき〔者〕ずんざ搥練紅の衣服也それを打

殿にてうたせてつやを出す也有かたしとふくめたり内のつぼね〔は〕ほそどの

局の事をいふ也上小部 是より以下ほそどのよき故をいふ也かみの〔こ〕じとみあけたれば、風いみ

じうふき入て夏も〔いと〕涼し、冬は雪あられなどの風に

たぐひて〔ふり〕入たるもいとおかし、せばくてわらは里の親類などの童

なるへし〔ぬ〕たるも〔あ〕しけれ〔ば〕びやうぶの〔う〕しろな

ご〔に〕かくしすへたれば、〔こ〕所の〔つ〕ほねの〔やう〕に聲たか

く〔え〕わらひなごもせていとよし、〔ひ〕るなごもたゆまず心づ

かひせらる、夜るは〔た〕ま〔い〕て〔い〕さ〔か〕うちとくべ〔き〕

やう〔も〕なきがいとおかしきなり、〔く〕つのを〔の〕夜ひと

よ聞ゆるが、〔と〕まりて、たぐをよび一つしてたぐが、其

とまりてたぐをよび一つしてたぐが ほとどの、清少の局ツホ子へ忍ひてくる人の沓の音のこの局の前にてとまりてひそかに小指にてたぐく也戸をたぐく也

人な^レり^レと ふど^レしる[・]こそおかしけれいと久し^レう^レ

た^レくに音もせねば、ねいり^レにけ^レるとや思ふらん^レど^レね

たく^レすこしうち身じろく^レを^レと、きぬのけはひ^レも^レさな

りと也 ねいらぬと推せん^と也 戸た^レきし人の扇をつかふ也

りとおもふらんかし、あふぎなごつかふもしるし^レ冬は火

是も内のさまを外にてねいらぬと聞しる心也 おけにやをらたつる^レひ^レばしのを^レともしのびた^レれ^レどきこゆ

るを、いとどた^レき^レまさり^レはらへは^レ聲にてもこ^レあけ給へといふ也 内よ

り物陰によりて其さまをきく也 おり^レもあり、又あまたのこゑに^レて

がらすべりよりてきく^レどき^レもあり、又あまたのこゑに^レて

さな^レりとおもふらんかし 内に身
うごかし衣の音などするはねいら
ぬとやねたくも推^スしつらん。扇を
つかひなどけしきばむさまもしる
くきこゆると也

又あまたのこゑにて詩をずし 是は
忍ひて來る人にはあらで。た^レあ
ひかたらふ人々の聲をき^レしさま
なるへし

詩^をずし歌なごうたふには、^{誦也} 詩歌の詠に感してあくる也
た^レかねごまづあけたれば、

こ^レへとしもおもは^レぬ[・]さ^レりつる^レ人もたちとまりぬ、いるべき

りてきたるにあらねは也 猶^レおかし^レみすのいとあをくお

かし^レげなるに、きちやうのかたびらいとあさやかに、すそ

の^レつますこし^レうちかさなりて見えたるに、^{是より男たちのさま也}なをし^レのうしろ

にほころびた^レえすきたる君たち、^{不絶}六位の藏人のあをいろなど

きて、うけばりてやり戸のもとなどにそばよせて^{麴塵の袍也前註}はたてら

こ^レへとしも おもはぬ人も此方よ
り戸をあけたればこの局へこんと
は思はぬ人も先立とまると也

すそのつますこしうちかさなり 几
帳のもとより女房のきぬのすその
はづれのすこし見ゆるさま也

うけはりて 河海云 諾 承諾。は
とかる事もなきをいふ也。我はと
思へる體也。此双紙の心はさやう
に我はがほにはえたてらず。少そ
ばめたるさま也

袖うちあはせて 袖かき合せてといふ心也つゝしめるさま也

す、^{壁也}へいの^{イかたに}前^{壁によりみしさま也}なご^押にうしろをして 袖うちあはせてたち

たるこそおかしけれまたさしぬきいどころ、^{最濃也 紫のこき色也}なをし^のあざ

いろくのきぬどもこぼし出さしぬきのわきなどより下着の色々に見えたるさまなり

やかにて、いろくのきぬどもこぼし出たる人の、^{簾を押入て}すををし

半身内へ入たるさま也

いれて、なからい^ひりたるやうなるも、^{外より見ては優ならんと也}とより見るはいと

かしからんを、^{半身入たる人の}いと^{きよげなるすどりひきよせて文かき、}なをし

ももしは^{さま也}鏡^{かみ}こひて^{鏡をこひよせかりて也}み^{ひんなごかき}なをし^{なごし}たる^もす

べておかし、三尺のきちやうをたてたるに、^もか^{額也}う^のしも

は^はた^たす^すこし^{こし}ぞある、^{簾巻あげたるさまにや}とにたてる人^と、内にゐたる人と

物いふ^かかほのもとにいと^{にく}、あたりたるこそおかし

けれ、たけの^{いと}たかくみじからん人なごやいからん

ん^{たいていのせいたけの人にはみな顔のほとに几帳のあたらんと也}なをよのつねの^人は^はさ^のみ^ぞあらん、^まい^してりん

祭、調樂也^{じのまつりのでうがくなごはいみじうおかし、そのもりの官}

人^になごの^{炬火也}ながき松をたかくともしてくびはひき入て^{寒き夜の體にや}い

けは、^{炬火のさきの物に近きさま也}さきは^{さしつけつばかりなる}に^どおかしうあそび

物いふかほのもとにいとにく、あたり外の男内の女と物いふ顔の程に彼三尺の几帳のあいあたり隔たるゆへにくといふ也
たけのいとたかくみじからん背たけのすくれて高き人と。一向にせい短き人などは、何も几帳にはつれやせぬいかあらんと也
まして、前にすべておかしおかしけれなどあるをうけてましてと也
りんじのまつりのでうがく、宗祇帝木の別勸云。臨時の祭とは北祭の事也。十一月酉也。調樂は午の日也。大内にてある事也。愚案、江次第、二十日、寛平元年十一月廿一日有賀茂臨時祭事。右近中將藤原時平爲使云々。これ初めにや。猶其次第等委シ其祭に舞樂あるを禁中にて先試樂有て次に調樂とて樂人舞人等をとのへさせ給ふ事也
とのもりの官人などの長き松 主殿

司は炬火^{タイマツ}庭火などをつかさどる物也。江次第^{エノセ}の臨時祭の試樂に主上入御の時若^{モトノバヤ}及^ニ昏黒^{クニ}主殿^{ヌシノミヤ}の官人奉^ニ炬火於庭中^ニとあり。これ調樂の時ならねども大かた其さま是に^{ナツラ}准^テへて知べし

日のさうぞく 源氏には日のよそひとあるを。細流に東帯也。直衣は^{ナナシ}宿衣也。東帯は晝のよそひ也。殿上人の隨身とも 中將少將などの召具せられし隨身也。イ本供の隨身とあるは彼君達の隨身也

あらたに生るとみ草の花 うたひ物なるへし。大鏡ニ云ク一條院の御時の臨時の祭に御前の事果て上達部たちの物見に出給ひしに。外記のすみのほど過ぎせ給ふとてわざとはなくて口ずさひのやうにうたはせ給ひし。とみ草の花てにつみいれて宮へまいらんほどを例のにはかはりたるやうに承たりし云

じまる也^{イタテ} 出^{イタテ}て心ことに思ひたるに君^{イタテ}だちの^{イタテ}日のさうぞく

也 して、たちどまり物いひなごするに、^{イ供のずいじんとも}殿上人^{イ供のずいじんとも}のずいじんご

ものさきを^{ひそかに警蹕する也}のびやかにみじかく、^{をのが君だちのれうにを}をのが君だちのれうにを

ひたるも、^{あそびにまじりてつねに似ずおかしうきこゆ、}あそびにまじりてつねに似ずおかしうきこゆ、

〔夜ふけぬれば〕^{夜明て無人樂人などの歸るを見んと待也}猶あけ^てなから^{かへるをまつに、君だちのこ}

るにて、あらたにおふるとみ草の花どうたひたる〔も〕、此た

ひはいますこしおかしきに、^{眞人也きすくなる人也}いかなるまめ人にかあらん、^事す

果たりとて急き出るなるへし^{くぐ}しふさしあゆみて〔出〕ぬるもあれば、^{わらふを、しば}はし待

給へと也^{何とてさやうに猶明ぬ夜を見捨て急き給ふそと也}しや、^{なご、}さ夜を捨て^ていそきたまふ、^{ごあり}〔て〕なご

いへ〔ご〕、^{心ちなごやあしからん}たふれぬば^{かり、もし人}な

と〕^{やをひてとらふると見ゆるまでまごひ出るもあ}〔め〕り

是より又別段也^{中宮の定子のおはす也}しきの御ざうしにおはしますころ、^{こだちなご}の

物ふり、^{屋臺の様體也}屋のさまも高うけごを^{けれご}すぐるにおかしうお

ぼゆ、もやはをにありとて、^{みな}〔みへ〕へだて出して、^{みな}ひ多

々。是此双紙とおなし^{ウタヒモノ}詠物のつゞきなるべし。とみ草は稻の事と梁塵愚案抄にありとありてなと しばし有と也。とばかりありてなどいふとおなじ心なるへし

もやはをにありとて 化生の物ありとてをそれて隔て也。南殿の鬼の貞信公をおびやかし河原院の靈の京極の御息所をとりいれし^{類古}今著聞第十七變化の部に猶此たぐひ多

みのひさしに御中宮の御座なるへしきちやうたてゝ、またひさしに女房はさふ

らふ、陽明門也前註このゑのみかごより、左衛門の陣ちん建春門也前註にま入給ふ上達部

のささサキきども、殿上人のはみしかければ、おほさきこさきと聞

つけてき「さはぐ、あまたゝびになれば、其聲とももみな

きゝし「られ」て、隠聲に付て其人ぞかの人ぞとをしはかりにいふ也それ

といへば、人してみせなどするに、いひあてたるは、されば

こそなごいふもおかし、ありあけのいみじうきりわたりたる

殿上人のはみしかければ 上達部と
殿上人とは隨身のサキ隠聲も差異あ
るにや。前にも殿上人の隨身ども
さきを忍びやかにみじかくとあり
おほさきこさき 上達部のサキ前詞を
大ききといひ。殿上人のをこさき
といふとかやみな隨身の故實なる
へし
あまたゝびになれば 其聲度々きけ
は其聲を女房の皆聞知て也

庭清少等の女房のおりて月見ありく也におりてありくをきこしめして御まへにもおきさせ給へり

うへなる人一人々のかきりはみな「はみな・・・」おりなごしてあそぶにやう

「あけもてゆく、左衛門の陣ちんにまかりて」見んとて「いゆ」け

外夜の女房も追々に行也の女房も追々に行也「を」ひ付て「ゆく」に、殿上人あまたこゑし

て、何々一聲の秋といふ心也なにがし「こゑ」の「秋とす」んじて「ま」いるをさすれ

ば、にげいりて「物なごいふ、月を見給ひける」なごめで、

みかけしもありと也、よるもひるも殿上人のたゆる折イなし、上達

なにがし「こゑ」の秋 古詩を朗詠す
る也。是河原ノ院にて夏ノ日閑サク選
ノ暑サといふ題を源ノ英明池冷ノ水
無三伏ノ夏ニ松高ノ風ニ有ニ一聲秋
といへる句を何々一聲の秋とやは
らかに書たる文の一跡なるへし

まかてまいり 上達部の禁中を退出し。又參内せらるゝに。大かたに急なる公用などなきは后宮へ參上と也。后宮の御威勢をいふなるへし

部〔まかんで〕まいり給ふに、大かたにて也 おぼろけにいそぐことなきはかならずまいり給ふ

あぢきなきもの

わさとおもひたちて 親の態々思ひたちて禁中へまいらせしむすめ也人にもいはれむつかしき事も 宮仕うるさげ也と人にもいひたてられ。我も實に物うければ也いかてかまかでなんといふことぐさをして出て 何とぞして里へ退出せん

わざとおもひたちてみやつかへに出立たる人の、出したてし心なるへし ものうがり
〔て〕うるさげに思ひたる、〔人にもいはれ、むつかしき事もあれば、いかでまかんでなんといふこと 草をして出て親をうらめしければ、またまいりなんといふよ〕あぢきなき心をふくめし也 養子の たりこのかほにく

んとつねの言種にいふ也ことくさは口ずさひに常に云也 おやをうらめしければ 里亭へ出ても親は宮仕へを物うげなりといさめなどしてうらめしければ也

顔の我にやさしからぬ也 はしめより舞にならんとも思はさりし人也
〔さ〕げなる しぶくにおもひたる人をし のびて 〔に〕と

りて、思ふさまならず〔と〕なけく〔人〕

いとをしげなきもの

〔い〕とをしげなきもの
〔人〕によみてさらせたる歌のほめらるる、されどそれはよし

いとをしげなきもの おしからぬ心もあり。愛相なきこゝろもある也されどそれはよし 人のためにして其かひあればよしと也。此次に人のためにしても其かひなき事をいはんとて也

遠國へ下る人也 此詞にて清少の頓着なき本性見えて奇特にや
とをきありきする人のつきくえんたづねて文えんといはず
れば、しりたる人のがりがり、人のもとへ也等閑と書心にもいらぬ事なれば大かたに書 なをざりにかきてやりたるに
てやりし也
まいたはりなりとばらだちて返事もとらせでむとくにいひな

なまいたはりなりと 彼知人文體のいたはりなきに腹立して。返事もせぬ也もとより心にもいらで等閑に書し添状なれば。返事なくともおしげなきとの心也

うづえのことぶき 卯杖は正月上の卯ノ日。東宮を始め奉り。左右の兵衛府作物所などより大内へたてまつる事也。祝ひの杖とも歌によめば其祝言也。江次第二裏書云

仁壽二年正月諸衛 獻祝杖 遂魅稿云々これ也。卯杖とて桃椿などにてつくれる杖也。イニうつえのほうし追而可考

神樂のにんぢやう 人長は神樂の舞人 陪從などの長也。内侍所の御かぐらに韓神其駒などの時起て舞もの也。内侍所の御神樂は一條院の御時はじまれるよし江次第にあり。其次第等猶くはし

御りやうゑの馬おさ 六月十四日祇園の御靈會に禁中より馬をむかしはひかれし也。公事根源云祇園御靈會 十四日 此まつりの日禁中

にはことなる事なし馬長など催し

つかはさるれども御覽はなし。祇園の社は貞觀十一年に託宣の事ありて。山城の國にはうつし奉しにや。素盞鳥尊の童部にて牛頭天王とも武塔天神とも申也云々

又御靈會のふりはた 是も祇園會にむかし振幡といふ事ありしにや。今は絶たる義式にて知かたし

とりもてる物 此詞異本にはなくてくゝつのことぶきを前心のちよげなる物の内に書つらねたり

くゝつのことぶき 傀儡の琴取にやイ本くゝつのことぶきとあり可尋之

除目に第一の國得たる 正月あがためしの除目に大國などの受領に成たる事なるへし。大國上國中國下國とてあり職原抄ニ委

御佛名のあした 是より例の物かたり也。十二月の御佛名三ヶ夜過て明朝の事なるへし。年中行事ノ歌合ノ註ニ云 佛名は十九日より廿一日まで三ヶ日の間三世の諸佛の御名を唱て六根の罪を懺悔し侍

る心也寶龜五年十二月よりはじまると云々。佛名の装束は延喜式圖書

いひなす也
したる

心〔ち〕よげなる物

うづえの〔ことぶき〕
〔み〕神樂の〔にんぢやう〕〔人長〕〔池のはち

すの村雨にあひたる御りやうゑの馬おさ 又御りやうゑのふりはたさるるものこりやうゑのむまのおさいけの

りはたさるる村雨にあひたるくゝつのことぶき
〔除目に第一の國

るたる人

〔とりもてるもの〕

〔くゝつのことぶき〕
〔除目に第一の國えたる人〕

御佛名の〔あした〕〔ちこくゑの〕〔御〕〔屏風取渡して、宮に御ら

んせさせ奉らせ給ふ、〔ゆゝしう〕いみじ〔うゆゝしき〕事

にあり。江次第に猶委
ちごくゑの御屏風とりわたし 御佛
名の所より后宮の御かたへ取わた
して見せまいらせ給也雲圖抄佛
名の所に云以ニ地獄變ノ御屏風七
帖立ニ七夕之間有ニ綱鎖子等ノ或
書ニ云ク若無ニ件ノ御屏風ノ之時ハ
用ニ漢書御屏風云々。榮花物語第
三さまくの悦の卷に十二月の
十九日になりぬれば。御佛名とて
地獄繪の御屏風などとう出てしつ
らふとあり

限りなし、是見よ〔かし〕とおほせらるれど、さらに見侍ら

しとて、ゆ〔か〕しさに〔こ〕うへやにかくれふしぬ、雨い

た〔く〕降てつれぐなりとて、殿上人うへのみつばねにめ

して御あそびあり、道方六條左大臣重信六男正二位中納言

濟政道方ノ弟阿波權守 筆也 行成卿にや 〔しやう〕ふえ、つねふさの

大臣高明ノ三男長保三年八月廿五日任左近中將 〔少〕おもしろ〔し〕ひとわた

りあそびて、びはひきやみたるほどに、大納言殿の、〔の〕びは

琵琶行の語を詠吟也 〔の〕はや〔め〕て、ものがたり〔せんと〕することを

そしと〔いふ事を〕す〔ん〕じ給〔ひ〕しに、前に清少のうへ屋

にかくれふしぬと有し也 〔なほ〕つみ〔は〕おそろしけれど、〔猶〕

ひはのこゑはやめて 琵琶行ニ云ク
忽聞ニ水上琵琶聲。主人忘レ歸 客
不レ發。尋レ聲聞問彈 者誰。琵琶
聲停 欲レ語 遲この句を誦し給ふ
也

物のめでたき^{さへ}は^えやむまじとてわらはる^{人々に笑れし也}、御^{大納言の詠吟}こゑなど

の事也
のすくれたるにはあらねどおりのことさらにつくりいでたる

やうなりしなり

頭中將 勅物云々齊信卿正暦五年八月廿八日藏人ノ頭。長徳二年四月廿四日任ニ參議ニ廿歳云々恒徳公三男也

是より別段也 清少の事を誰にても譏せしなるへし
頭中將の^そろなるそらごをきゝて、いみじう^{清少をい}いひお

ひくたし給ふ也
とし、何しに人ど^{おもひ}ほめ^{けんなど殿上にて}もい

みじ^もなんの給ふ^とき^くに^もはづかしけれごまことな^{議人のいひ}

なしなれはなり
らばこそあらめ、をのづからきゝなをし給ひてん^などわら

ひてあるに、くろごの^{かた}へ^なご渡る^{にも}、こゑ^なごす

くろどのかた 黒戸也清涼殿の北の瀧口の戸の西なる由拾芥にあり
こゑなどするおりは袖を 清少の聲
すれば頭中將やがて顔に袖をおほ
ひて清少を見給はぬ也

るおりは、袖をふたぎて露見をこせずいみじうにくみ給^へふ

を^{清少其いひわけもせず見いれさる也}どかくも^{いはず見もいれですぐす}か^うも^に、二月つこもり

がたの比雨 いみしう 雨 ぶりてつれづれなるに、禁中の御物忌に

頭中將をこもりて也
こもりて、さすかにさうぐしくこそあれ、物やいひにや

らましとなんの給ふと人々かたれど、清少の詞也 答也

てあるに、ひん日 一日しもにあくらしてまいりたれば、よる

のおとどにいらせ給ひにけり、長押の下は敷井一つへだて、次の間也 なげしのしもに火ちかくとり

さすがにさうぐしくこそ 頭中將のいへりし詞也。清少をにくみながらもさすがに清少とかたらはねばさひしきに。物いひやらんと齊信のの給ふとある人清少に告し也よにあらじ 頭中將は我をうとみはて給へば物いひおこせ給ふ事はあらじとの心也。よには助字也
ひとひしもにくらし その日一日清少の局に居暮して。夜に入て后宮の御かたへまいりたれば。はや后宮は御寝ありしと也
よるのおとど 年中行事ノ歌合ノ註ニ云よるのおとどと申は天子の御寢所なり劍璽ををかるゝ故にいつも灯をけたす。是をかいともしと申にやとぞ云々猶禁秘抄ニ委シ

へんをぞつく 女房達ハシツキ篇突してある也。稱名院殿御説。篇つきとは文字のつくりと篇とを分て。つくりを隠して篇をもつて何といふ文字といひあつる事のたとへば嫁かくのごとくなるへし。橋姫巻に基うちへんづきなどあり

禁秘抄に帳ノ南西北ニ敷レ疊ヲ爲ニ女房座ニ云々是にや
よせて、さしつごひてへんをぞつく、あなうれしや

をよるこぶ也
どくおはせなご見つけていへど、清少心也后宮のおはせねば也 何し

にのぼりつらんとおほえてすびつのもとにゐたれ

ば、女房達清少のほとりへあつまりし也 又そこに又あつまりゐて物なごいふに、外より何の誰と何がしさふ

名のりて清少に使者のあるさま也
らふといとほなやかにいふ、清少の詞也只今こそまいりたれ其ほとに何事のありて人のよふそと也 あやしくいつのまになに事の

あるぞととはすれば、殿上人達よりの使なれは也、殿守づかさなり、たゞこゝも

人つてならて申へき事なん 清少に直に可申事と也

詞也 に入づてならて申べき事なん、といへば、清少のたち出

て也 是頭の中將の殿のたてまつらせ給ふ、御かハ

り 事 ごとくといふに、清少の心也 いみじくにくみ給ふを、いかなる

御文ならんとおもへど、たゞいまいそぎ見るべきに、

いわいまきこえん 殿守づかきは先かへれ返事はやがてこれよりせんと也

あらねば、いね、今きこえんとて、ふどころにひきいれて

猶人の物いふきゝたと 立歸て彼へんづきせし女房の清少のほとりへきて物がたりするをきゝてあると也

いりぬ、猶し人の物いふきゝなどするに、主殿司又すなは

さらば其ありつる文を給りてことなん 只今返事なくは其文とり返して來よと頭中將の給ひしと也

來て也 ちたちかへりて、さらば其ありつる文を給はりてこ

となんおほせらるれつる、早く返事給はらんと也 清少の詞也 かに、あやしうく

いせの物かたりなるや 伊勢物語に。長岡の母より業平へ。とみの事とて御文ありといへり。頼は急々の事なればなり

いせの物かたりなるやとて見れば、あをきうすやうにい

などてかさ人げなき物は 草の葎と名付たるをとがめてさやうの名は聞かれじ。玉の臺などよばれ候はんにこそ出あはめと也

とをぞろくし「ふと」へば、「あやし」清少の詞也なごてか「さ」人げなき

ものはあらん、玉のうてな「と」もどめ給はましかば「いできこいらえて

えて」ましといふ、源中將の詞也あなうれししもにありけるよ、うへ「ま」で

よべありしやう 昨夜のありさまくはしくかたり給ふさま也

尋ねんとしつる「物」をとて、よべありしやう、頭中將の殿上の

番所也
る所に「て」、物の心をもしりし人々をいふ也すこし人々しきかぎり六位まであつまりて、萬

の人のうへ、むかし今とかたり「出」ていひしつゝゐでに、猶此も頭中將の

むげに絶はてこそ 清少と一向に中絶しては堪忍しがたきと也。前にさうくしくこそあれといへる首尾也

詞清少をさす也無下は一向に也 にくみながらものむげにたえはててのちこそ、さすかにと也さすがにえあらね、堪忍しかたきもしいひ出

もしひ出る事もやと 彼讒人のいひわけを清少の方より云出つよとまでどきもなくつれなくねたきとなり。前にいみしうにくみ給ふを。とかくもいはず見もいれで過すとありし首尾也

心也 少も也清少のてい云也 さすかにと也る事もやとまでごいさか何ともおもひたらずつれなき「が」も

いと「と」ねたきをこよひあしともよしともさだめきりてや 清少のありさまの善惡をさだめんと也

只いまは見るまじきとて 前に只今いそぎ見るべきにあらねばと有し事也

みなんかして、みないひあはせたりし事を、心見にかの蘭省の花の時とい只いまは見るま

たゞ袖をとらへてとうさいをさせず
清少を東西に身ゆるぎもさせず返
事とりてきたれ。左なくはその文
取かへしてまいれと也

ひやりしと也
〔き〕とて入〔給ひ〕ぬと〔て〕そのも〔り〕づかさ
〔か〕いたりしを
〔かい〕ひしか

は・ 又をひかへして、たゞ袖〔て〕をとらへてとうさいを〔せ〕

させずこひとり〔て〕もてこずは、文をかへしとれといましめ

て、さばかりふる雨のさかりにやりたるに、
主殿司のかへりし也
いととく歸りき

たりこれとてさし出たるが青きうすやう也ありつる文なればかへしてけるか
さてはもとの文を其

かへしてげるかとうち見るにあはせ
て かの文を見ると一度に各感じて
あつとわめきしと也

まゝ返したると見しと也
〔て〕うち見〔た〕るにあはせてをめけば、
源中將などの心也
あやしいかなる

事ぞと〔て〕みなよりて見るに、
草のいほりの返しなれば也いみじきぬすびと〔かな〕、猶

いみじきぬす人かな 清少を只人な
らずとほめんとて左禮ていへる詞
也。禪話センワに此老賊ラウソクなどいふたぐひ
なるべし

えこそ〔思ひ〕すつまじけれと〔て〕見さはぎてこれがもど

つけてやらん、源中將つけよな頭中將なといへりしにやいふ、夜ふくるまでつけ

わづらひて〔なん〕やみにし、〔此事〕事はゆくさきも〔必〕
世がたりにし
かた

これがもつけてやらん 彼下句に
上句つけてやらんと也

てほめ草にせんと也
りつたふべき事なり

〔な〕となん

〔見・み・な〕

さだめし〔な〕と、い

みじ〔く〕
〔う〕

かたはらいたきまでいひきかせて、

〔今・は〕
〔は〕
御名

中將の詞也
〔を〕は
〔い・ま・は〕

〔草のいほりとなんつけたるどて、いそぎた

前に草の菴やあるくといひしことはり也

いそぎた

ち給ひぬれば、

清少のひとりごつにや

いそわろき名の末〔のよ〕まであらんこそ口お

し〔かなるべけれ〕といふほどに

〔修理助・すりのすけ〕

のりみつ、
則光の清

修理助のりみつ 未勘 奥にかうふ
りえて遠江ノ介に任す。行成卿よ
りと前に清少に通ぜし人也

なぞつかさめしありとも 司召は秋
の京官の除目をいへり。江次第な
どに委。除目に官を得し人はよる
こびとてこなたかなたに拜賀の事
あり。今則光よろこび申にまいり
たりといふに付て。司召もきこえ
ぬに何に昇進せしそと也

少にいふ詞也草の庵の事也
きよろこび申に〔なん〕

清少御前にやあらんとて是まで尋きしと也
うへにやどてまいりたりつるとい

へばな〔ん〕ぞ、

つかさめし〔あり〕

ともきこえぬ〔に〕、何

になり給へるぞと〔とい〕

へば、い

〔な〕でまことに〔いみしう〕うれ

しき事の上侍しを、

早く清少にいひきかせたく思ふゆへ夜の明るをま
心もとなく思ひあかしてなん、かばか

ちしさま也
りめ〔いん〕

ぼくある事なかりきとて、はじめありけることゞ

このかへりことにしたかひて 前に
こよひあしともよしともさためき
りてやみなんとの事也

も、中將のかたり〔つる・給へる・給つる〕おなじ事〔ごも〕をいひて、〔た・

た〕このかへりことにしたがひて、〔こかけをしふみす

へて〕さる物あり〔おん〕とだにおもはじと頭中將〔の〕の

たま〔ひしに〕、〔ある限りかうようしてやり給ひしに〕たゞに

きたりしは中くよかりき、返事とりて殿守司のきたりし時也もてきたりしたびは、いかなら

たゞにきたりしは中く、はしめ返
事なくて殿守司の歸りしはなまし
るの返事あらんよりはかへりてよ
かりしとなり

せうとのためも 則光清少と中よき
故人々戯に兄妹と申さるゝ事を今
も云也。實の兄弟にはあらず

んどむねつぶれて、まことにわ〔ろ〕からんは、せうどのた

め〔に〕もわ〔ろ〕かるべしとおもひしに、草の菴の返事のすぐれしなのためだにあら

事也、すそこらの人のほめかんにて、せうど〔たち〕こ〔そ〕きけ

このたまひしかば、した心〔ち〕はいとうれしけれど、歌連歌はさやう

不得心なると也則光は歌嫌ひと見ゆ
のかたに〔は〕さらにえさふらふまじき身になん〔侍る〕と申し

せうとこそきけ 兄殿きかれよとた
はふれの給ひし詞也。夕顔の巻に
右近のきみこそ先物見給へとあり
若紫の巻にもうへこそなとあるお
なし詞也

ぶれておほゆる、清少と則光との中の事也此いもうとせうといふ事をば、う

へまでみなしろしめし、殿上にも、修理亮とは則光をいはて也つかさの名をばい

はかでせうとぞつけらたる、則光と清少と也物がたりなごしてゐた

るほごに、まづとめしたれば、まいりたるに、此事おほせら

れんとてなりけり、后宮の御詞也一條院も此草の庵の事をおほせられうへのわたらせ給ひて、かた

まづとめしたれば 清少を后宮のめ
す也少々用ありともまづくまい
れと也
此事おほせられんとて 草のいほり
の返事の事なり

しと也
りきこえさせ給て、おのこごもみな扇にかきつてな

んもたるなとおほせらるゝにこそあさましう何の

いはせける事にかとおほえしが、さてのちに袖のぎち几帳

やうなごもとりのけて、おもひなをり給ふめりし

あさましう何のいはせ 我ながら心
ならずもいひける草のいほりかな
といふ心也。かく上つかたまで御
沙汰を恥おもへる心はいふ也

袖ぎちやうなどとのりかけて 前に頭
中將袖を顔にへだて、清少を見お
こせ給はぬ事ありし。几帳はかほ
かたちを隠しへだつる物なれば。
袖几帳といふなり。此事の後は
さやうに清少を見ぬやうにもせで
彼そらごとゆへのにくみも頭中將
の思ひなをりしと也

其あくるとし也
かへるとしの二月二十

五日に、宮のしきの御ざ

梅つぼに 梅壺は凝花舎といふ御殿の名也梅をうへられしゆへの名とぞ。禁秘抄ニ云ク梅壺、梅ハ西ハ白梅東红梅之由在清少納言記ニあるも此段の奥に見えたる事也。こゝに定子のおはすにやくらまへまうで 鞍馬寺 水鏡ニ云ク延暦十六年藤原伊勢人といふ人。貴船の明神の御をしへにてつくり奉りし也。元亨釋書には此伊勢人の馬のとまりし靈地なれば鞍馬と名付し由あれど。日本紀には天武天皇の御馬とめ給ひし故の名と見ゆ。古よりの名成へしこよひかたのふたがれば 鞍馬より清少へ方ふたがれば今夜は外へ方違に行て。明朝ゆかんと也。方ふたがりとは天一神などの方にありたる夜を云也。其夜は其ふたがれる方へはゆかで。ことかたにて明して。そこよりは方あしかゝねはゆく事也

うしに 出させ給ひし、御ともにまいらで梅つぼに清少留守せ

たりし、又の日頭中將の御せうそことて、きのふの夜くら

まへまうでたりしに、こよひかたのふたがりけれは、

かた たがへになんゆくまたあけざらんに歸りぬべし、か

頭中將清少に懸想なるへし局の戸早くあけよと也ならずいふべき事あり、いたくたかせでまてどのたまへ

りしかど、つぼねにひとり梅壺に清少斗はいかてか居るそみくしけとのへきてはなごてあるぞ、こによと

みよと也 定子の御いもうと也 のめしたればまいりぬ、ひさしくねおき

ね過して我局へおりし也 よる留守せし清少の従者か詞也頭中將のたきし也ておりたれば、よへいみじう人のたかせ給ひし、か

らうじておきて侍しかば、たきし人の詞也清少を清者のうへといふ也のた

頭中將の來しといへと也 まひしかごも、清少の手引あるまじきとの心也 おきさせ給はじとてふし侍に

みくしけとの 中ノ關白道隆公の四ノ君。一條ノ院の御匣殿。小一條院の母代と。榮花物語の系圖にあり。拾芥ニ云ク御匣殿は貞觀殿の中にあり。上藤の女房を別當とす女藏人あり。河海云御匣殿は内藏寮の外御服などたちぬふ所なり

きどかたる、心も【と】なの事やと【て】きくほどに【と】のも【り】

づかさ来て、頭の殿きうとののきこえさせ給是亦頭中將の消息也なり、殿上より退出するたゞいままか

【りい】づるを、きこゆべき事なんあるといへば、見清少の答也后るべし

宮に用事にてまいると也
【に】なんのほり侍る、そ后宮にて承らんと也こにてといひて

【つ】つばねはひきもやあげ給はんと心おもひさはぎたる句也ときめき【して】

はじとみあけて 花鳥餘情ニ云半ハシトミ蒔
は下は格子カフシはた板などをうちて。
うへに蒔シトミツリを釣て外へ上るやうに
したるをいふ。車にも半蒔とてあ
り上のしとみ斗をあげたれば半蒔
とは名づけたる也

【わづらはし】けれ【は】梅つばの東をもて【の】
【はつら・】
しとみあけて、ここゝにて頭中將にま見えんと也にといへば、め頭中將のさま也てた【て】ぞあゆみ出給へ

る、櫻前に註の【あやの】なをし【の】いみじく【う】花ばなど、うら

の【色】つや光の字也などえもいはず【きよ】らなるに、る前に註びぞめのいと

【に】指貫のうはもんにや藤のおり枝【おとろく】しく折亂おりみだり

て、直衣の下の御衣の色也紅のいろうちめなどかやくばかりぞ見ゆる、

次第也下・し・た・い

にかきなりたる色也
にエン白きうす色などしたにあまたかさなりたる、せばき

たり・たり・

せばきまゝにかたつかたは下なから
縁などのせはき所なれば。腰など
かけたるやうに。半身は下さまに
て。簾ミヌのもとナゲシの長押などによりぬ
給ふ也

まゝにかたつかたはしもながら、すこしすのもどちかうく

よりぬ給へるぞ、まことにゑにかき、物語のめでたきことに

いひたる、むかしのゑものがたりの人も是にこそはとかやうならん見そえたる、御前まへの梅は西禁秘抄にいはしろ

ゑにかき物がたりのめでたき おく
にてうつほ物語の仲忠の大将の事
につけて此頭中將の事をいひ出る
事あり。それをかゝんとて先こゝ
にかやうにいふなるへし

へるは是也くんひがしはこうばいにてすこし散かたに也おちかたになりたれど、

猶おかしきに、うららと日のけしきのどかにて、人に見せ

まほし、みすのうちまにしてわかやかなる女房などの、

髪のうちくしき也かみうるはしうくながくこほれかりりなごいそひ

すのうちまにして かやうの折ふし
は只にも人に見せまほしく美麗な
るに。まして簾中に ワカキ若女房の髪
うるはしきなどあらば。猶今すこ
し見所あるべきに我が居て無興と
也

あたるめる・・・・・のいらへなとしたらんは、
ためるやうにてもものいらへなとしたらんは、
いますこし

さだすぎふるくしき サダスキ 央過源氏
におほき詞也年齢のなかに過て
古めかしき事也

〔おかしう〕見所〔も〕あり〔おかしかり〕ぬへきに、是より清少のいごさだ

かみなども我にはあらねばにや 上
に若き女房の髪うるはしき事をい
ひしに對して我身にはさやうのう
るはしきはなきにやと也

みつからのさまをいふ也
すぎふるくしき人の、かみなど〔も〕我にはあらねば〔に〕

大かた色ことなる比 キヤウフク 輕服などの
時節にや。鈍ニビいろを着用也

や、どころく 髪のちりくとそけたるさま也 わななきちりぼひて、大かた色ことなる比な

れば、色のうすき心也 あるかなきかなる〔に〕うすにび〔ごも〕あはひも見

々もなき心也 えぬ きぬ〔ごも〕なご はかりあまた〔あれ〕は、露

もきすうちきすかた 裳は宮仕へ
人の着する物なれど。后宮おはさ
ねば清少裳モを着ずして。鞋ウチキばかり
着たるさま也

光ハ榮同 のはへも見えぬに 后宮は職の御曹司におはして梅壺にはおはさぬ也 おはしまさねば、もきす、うちきすがた

にてゐたるこそ物ぞこなひに 興さましなると也 〔て〕くちおしけれ、しきへなん

さてもよべあかしもはてど かの方
薄所より未明に歸りて。清少の局
へ戸たきよりし事を語り出し給
ふ也

へまいると也 清少御事付申 さぬかと也 いつ比職へはまいるそと也 まいる、ことづけやある、いつかまいるなどのたまふ、是も頭さて

中將の詞也 もよべあかしもはてど、句 〔れ〕ごもかねてさいひ〔て〕しか

西の京よりくるまゝに 彼方違所な
るべし。西京に。野寺町。細井小
路。宇多ノ小路。木辻キツジなど其小路
の名拾芥に委

し事也 ば、まつらんとて、月のいみじうあかきに西のきやう とい

いらへのはしたなき 従者が答の事也。前にかくなんとの給ひしかどもよもきかせ給はじといひし事なり

ふ所

よりくるまゝに、最前清少の局をたゝかれし事也 清少の局の留つほねをたゝきしほど、からうじて

守の従者かさま也
ねをびれ

て

おき

出

たりしけしき、いらへのはしたな

さ

なごかたりてわらひ給ふ、むげにこそおもひうんじに慥の字也

なとさるものををきたる いかてかくはしたなき従者を留守にはをきしぞなど中將の給ふ也

らみいきとをる心也
しか、なご

さ

るものををきたる 〔な〕ごのたまふ、清少げ

の心也尤うんし給ひけんとも
にさぞありけん

いとおしくもおかしくもあり、
おかしういとおしうもあり、
をかしういとおしうもあり、
しば

とより見ん人はおかしう 外より見
ては此頭中將の花やかなる形にて
かたらひ給へは内の人ゆかしから
んと也

しありて
頭中將かへり給なり外也

いで給ひぬ、とより見ん人はおかし

う、内に

おくのかたより見出され 奥より見
出さは清少の形にけれは外に頭
中將のやうなる人やあらんともお
もふましきと也

いかなる人〔の〕あらんとおもひぬべし、おくのかたより見出いた

されたらんうしろこそ、
我が髪につき也

外にさやうの頭中將のやうな
る人やあらんとも思はじと也
〔もえ〕お〔もふ〕まし
〔ほゆ〕

旬
けれ、くれぬれはまいりぬ、御

后宮職へまいりしと也

〔まへ〕に人々〔いど〕おほく〔うつ

ごひ、古物語草紙也あて、
へ人などさふらひて

物語のよきあしき、にくき所な〔ん〕と

なかつたがことなと。うつほ物語に
仲忠の大將とて。わかこ君といひ
し人の子にて。うつほの俊蔭がむ
すめの腹に生れし人。おさなくて
母に孝有て。さまの奇特あり。
琴をよくひきて。帝の内の親王
を北方に給ふべき宣旨下りし事な
とあり

ごをぞさだめいひ
いひかはす事也 誦也 仲忠也
しろひ
そしる
すうじ
すこし
なかつた
なご
がこと

〔なご〕、后宮も也御前にもをとりまさりたる〔事・おほせなご〕仰られける、
ほと

わらはおひの 童生也 仲忠はわら
はの生立より奇特有し物ぞと深切
に后宮にも被仰ぞやと清少にいふ
也。仲志に蟲辰の人々の詞也

人々清少にいふ詞也此草子の善惡を申せと也
まづこれはいかにと
く
ことほれ、なかつたかわらはおひの

あやしさを、深切に也せちに仰らるゝぞ
〔なごいへば、清少の何か

きんなども天人おるはかり 仲忠が
琴ひきて夏の空に雪をふらし御殿
のかはらをおとせし事などうつほ
物語に見ゆ。其外琴をひきて天人
の感しくたりし事。信の大臣。清
見原の天皇などの事どもあれは也

詞何かはよからんと也
〔は・おほきんなどとも天人〕の〔お〕るばかりひき〔い〕て、いと

なかつたがかたうどと思て いとわ
ろき人とはいへど琴をひきし事な
どいふは。下心は清少も仲忠が方
人と人々思ひて。されはよと云也
實は清少は頭中將をほむる下心あ
りて。仲忠をわろき人といひしな
るべし

あまりの事にて云ことは也
わろき人也、みかごの御むすめやはえたるといへば、人々の心也なかつた

がかつた人ど〔心・人々の詞也を〕えて、さればよ〔なごいふに、此事

ひるたゞのふかまいりたりし 前に
職にまいると頭中將の給ひし。此
詞にてまことにまいられし事見え
たり

御ことは也
ごもよりは、ひるたゞのふかまいり〔たり〕つるを見ましか
頭中將の事也
清少の見た

らはと也
ば、いかにめでまごはましとこそおぼ〔ゆ・えつれと仰らるゝ

に、〔人々〕、人々もたゞのふをほむる也さてまことにつねよりもあらまほし〔う〕〔こ

そ・なごいふ、清少の詞也頭中將の美々しかりし事を申さんとてと也 まづその事 を こそ は けいせんとおもひて

まいり 侍り つるに物がたりの事にまぎれてとて、櫻の直衣以

下のいてたちありさまを申也 事 を の さま かたり きこえさすれば、誰も 人々の詞也 見つれど、

いと か う ぬ ひたるいと 糸針目 はりめまてやは見とをしつるとてわ

らふ、是も頭中のかたりし事也 西の京といふ所の あ れ た り つ る 事、もろともに見る あ は れ な り

人 の あ ら ま し か ば ど な ん お ほ え つ る、垣 な ご も み な や ぶ

れ て 苔 お ひ て な ご か た り つ れ ば、宰相の君の か は

おくにもあり の 松 は あ り つ や と い ら へ た り つ る を、頭中將の感して い み じ う め

其樂府をとふる也 西 の か た 都 門 を さ れ る こ と い く ば く の 地 ぞ と く ち ず さ

み ひ に し つ る 事 な ご、此うけこたへを御前の人々感じていふ也 か し か ま し き ま で い ひ し こ そ お か

かはらの松はありつや 西の京のあ
れて。垣カキやふれ苔生したるをかた
るにつけて。唐の驪山宮リサンキウの長安の
都の西にて荒し事。文集の樂府ガフに
あるを思ひよそへて問へる詞也
白氏文集の四樂府ニ云驪山高シ。高
々。驪山上ニ有レ宮。朱樓紫殿三四
重。暹々兮春ノ日。玉ノ聲 暖
兮 温泉溢。扇々兮 秋風。山
蟬鳴兮宮樹紅也。翠華不來歲月
久。「牆有衣兮瓦有松。吾君
在位已五載。何不三一幸ニ
乎其中。西去ニ都門。幾多地
下略

殿上人などのくるもやすからずそ人々いひなすなる 清少に懸想の人ならねど人々はとかく名を立ると也

しかりしか

清少の里亭へ退出して也 さとにまかでたるに、殿上人などのくる

を

やすからずぞ人々「は」いひなすなる、「い」どあまり心に引

め忍ひたるあやまちなればと也 いらたるおぼえはたなければ、さいはん「人」もにく「か」

「な」ともかゝやきかへさん、まことにむつまし「く」なごあら

「ま」し、「又」日比したしき人にて也「ひ」るもよるも「ば」何「し」かはなし

さいはん人もにくからず さいやうに 名たてがましくいひなす人もにく からぬと也。心にあやまりあらばこそをそれにくまめ實なき事はな にもおぼえぬ心也 何かはなしともかゝやきかへさん つねに親しく来る人をいかで恥が ぼに清少はこゝになしなといひて たゝには歸すべきぞと也。かゝや くと夕顔の巻に。恥かゝやかん よりはとある詞也。かゝはゆがり 恥るこゝろなるへし

人もくると也 ぬもさこそは「めくめれ」あまりに親疎の見まひもむつかしければと也「めくめれ」あまりうるさくも「げに」あれば、

此たび「いでたる所を」は「いづくともなべてにはしらせ

ず、「左中將」つねふさ「の君」なりまさのきみなごばかりぞし

り給へる、左衛門前に修理亮とありし同人也兼官にやの「せ」うのりみつがきて、物がたりな

とする「つゐで」に、則光か詞也「も」宰相さうじやうのの「中將」殿齊信卿の事也の「まいり給

つねふさなりまさ 經房濟政は。彼 佛名の翌日の上の御局の御遊に 琴笛の役者にて。清少に心よせこ となる人々也

清少の里亭を則光しらんと也
いかにかくすともとの心也
て、いもうどのあ[らん]どころさりともしらぬやうあらじ

いへ[と]いみじう[と]ひ給ひしに、さらにしらぬよし

[を]申し[し]に、わりなく清少の里をしめて問給也
あやにくに[し]給ひし事などい

ひて、知である事をなしとあらがふ也
ある事[は]あらがふ[は]いとわひし[う]こそあ

りけれ、ほとんど也
ほごくえみぬべかりしに左[中]將のいとつれな

つれなくしらせかほにて かの頭中
將の間給ふかたはらに源中將經房
のおはしてつれなくしらぬ人に成
てる給へりしと也。經房と濟政は
里亭をしり給へれば也

くしらずがほにてる給へりしを、
經房に目を見合せたらは心知と
かの君に見だにあはせば、

ちにておかしからんと也
えみ[ぬ]べかりしにわびて、
だいはんのうへに[あやしき]

和布也
めのありしを、
たどりに[と]りて
くひ[た]くひにくひ

ぎらはししかば、
中間也物くふへき折にもあらてくふをいふ也
ちうけんにあやしひ物やと
人々[人]も見

けんかしされどかしこうそれにてなん
和布をくふにまきはしてと也
そことは[申]さずなり

たいはんのうへに 臺盤也殿上人の
日給ををこなふ盤なり。委前ニ註

わらひなましかばふようそかしし
らずとあらがひながら笑ひたは
たのぶにさとられて。清少の有
所をかくすてたて不用にあらんと
也

にし、わらひなましかばふようぞかし不用也まことにしらぬなめり齊信卿の眞實に則光はしらぬ

さらになきこえ給ひそなといひ
ひて 此詞にてかねても則光に我有
所を齊信にいひきかせそといひを
きし事しられたり

と思給ひしと也
とおぼしえ(ト)たりしもおかし清少のこそなとかたれば、さら

詞也 ないひきかせ給ひそと也
になきこえ給ひそなごいどごいひて、ひころ久しうなり

ぬ、夜いたくふけて門をいたうおごろおごろしう

た、けば、清少の心也何のかく心もどなくうとをからぬほご

何のかくこゝろもとなくとをからぬ
ほとをたゞくらん 奥淺き家の門を
誰きくまじきとてかやうには何者
のたゞくぞとなり

をたかくたゞくらんときとてとはすれば、則光此時藏人なれ
たきくち成け

は瀧口を使にをこせし也
り、左衛門の文とてふみをもてきたり、みなねたる

に火ちかくとりよせさせて見いれば、文言也あすみごき

やうのけちぐはんにて、宰相たゞのぶ中將の御物いみにこも

をいふなるへし 清少の事也いもうどのあり所申せとせめらるゝ

左衛門の文とて 則光の文也 一本左
衛門のかみもととあり。前に左衛
門ノ尉とあり。奥に巡符の事あれ
は。督といふ本あやまりなるへし

みときやう 河海云 本朝月令ニ二月
云々。季ノ御讀經とは春秋内裏に
て大般若を講讀せらるゝなり。引
茶とて僧に茶をひかるゝ也。雲圖
抄ニ云フ初日被仰ニ度者ニ第二日引
茶 秋無之 番ノ論義 秋無之
第三日御論義 下略 圖あり。御装
束など延喜式圖書に委。江次第に
もあり

に、今はかくさんすちなしと也すぢなしさらにえかくし申まじ〔き〕、〔そこ〕とやき

かせ奉るへき、如何おぼす清少の返事次第にしたかはんと也いかに仰せにしたかはんと〔そ〕いひたる、返

事〔も〕か、和布でめを一寸はかりかみにつゝみてやりつ、さて後

清少のもとに則光の来ていふ詞也イせめたてられて〔に〕きて、一夜〔は〕せめ〔て〕は〔た〕てら〔れ〕て、すゞろなる所〔々〕に

ひきあてありきしと也〔なん〕ゐてありき奉り〔て〕、辛也めまめやかにさいなむにいとから

めを一寸はかりかみにつゝみて 前に則光和布を食たるとかたりし故 今も和布をやりて目くはするといふ心也必我有所を語給ひそとめくはする心也。奥の歌にて其心見えたり
一夜せめてとはれてすゞろなる 頭中將にあまりに清少の在所を問れて我もしらぬさましてそゞろなる所へ中將をつれありきしと也
まめやかにさいなむにいとからし 中將の眞實に我をせめうらみ給ひて迷惑と也

いわくの心也しいさて〔ど〕な〔ど〕も〔は〕かくも御かへり〔の〕なくて、〔そ〕ゞろ

なるめ和布のはしを〔は〕つゝみて給へりし〔か〕ば、彼めくはす心をしどりたかへた

らて返事をとれたかへたるかと則光のいふ也清少の心也るにやどいふに〔そ〕ぞ〔そ〕、あやしのたがへ〔つ〕み物や人のもさ

にさる物つゝみてをくる〔人〕やはある、〔ど〕りたかへたる

〔か〕ど〔い〕ふ〔い〕さ〔か〕も〔こ〕ろ〔も〕えざりけるとみるがに

人のもとにさる物つゝみて 只に心もなく和布をやる物かとは也。只にはさやうの物を人にやる事はなき事なれば。取たがへんやうもなき物をとの心也

くければ、物もいはで、すゞりのあるかみのはしに

かづきするあまの 歌海士のすなど

りするをかづきと云也。歌の心はかの和布をつかはせしは。我が在所をそことゆめくいふなどの目ぐはせならんと也。此とまりめをくはせけりなどいひつめざる所優美に心ふくみて面白きにや。此歌後拾遺集に入し。詞書に陸奥守則光藏人にて侍りける時などあり此草紙と同じ心なれば畧之

清少のうた也

かづきするあまのすみか **は** **そこ** **なりと** **ゆめいふ** などや

を **とたに**

めをくはせけん

とかきて **さし** **い** **だし** **たれば**、 **歌** **よませ給** **ひつ** **るかさら**

のりみつか詞也

に見侍らじとてあふぎかへしてにげていぬ、かう **かたらひ**

彼歌書し紙を清少のかたへあふぎかへしてにげたる也 たが

かたらひ

ひに也則光と清少の中の事也 **かたみ** **の** **うしろみ** **かたらひ** **なご** **する** **中に**、 **何** **事** **とも** **な**

ひに也則光と清少の中の事也

なごする中に、何事ともな

ひんなき事侍るとも たとひ便なく
うらめしとおほす事有ともと也

くてすこし中あし **う** **く** **なり** **たる** **ころ**、 **文** **を** **こ** **せ** **たり**、 **びん**

のりみつより清少へ也

なき事 **な** **侍** **り** **とも**、 **な** **ほ** **ち** **ぎ** **り** **き** **こ** **え** **し** **事** **か** **た**

侍りとも

し事かた

は **す** **て** **給** **は** **で**、 **よ** **そ** **め** **に** **て** **は** **も** **さ** **ぞ** **な** **ご** **は** **見** **給** **へ** **と**

はすて給はで、

よそめにてはもさぞなごは見給へと

なん **思** **ふ** **と** **い** **ひ** **た** **り**、 **つ** **ね** **に** **い** **ふ** **事** **は**、 **を** **の** **れ** **を** **お** **ほ** **さ** **ん**

よのつねにのりみつかいひし也

人は、歌〔を〕〔な〕〔ご〕よみてえさすまじきすべてあたかたきと
歌を我に給はるなと也 うたよみて給はらは怨敵と

おもはんと也
なんおもふ〔べき〕、いまはかぎりありてたえ〔な〕んと思はん

いまはかぎりありてたえなんとおもはん時 今限りとかきる心有て。中絶んと思ひ給はゞ歌よみ給へと也

時〔は〕〔を〕さる事はいへ〔な〕といひしかば、此返〔し〕に
うたよむ事をいふ也 かの則光の文の返事に也

清少のうた也
くづれよるいもせの山の中なればさらによしの、川とだに

見じ

くづれよるいもせの歌 彼則光が文に。よそにてもさぞなどは見給へといふをうけて。妹背の中もやうくくづれたれば吉野川とも其人とも。そなたにも見給ふまじきと也。古今ニ「流れては妹背の山の中に落るよしの、川のよしや世の中妹の山背の山とてあるを彼せうといもろとなど人々のいひし事にとりあはせてよめり

といひやり〔たり〕しもまことに見ずやなりにけん、返〔し〕も

せず〔なり〕にき、さてかうふりえてとをたあふみのすけ〔な〕
則光叙爵せし也 遠江介也巡爵のち受領せしな

どいひしかば、にくく〔し〕てこそやみにしか

物のあはれしらせかほなる物

はなた〔る〕まもな〔く〕かみ〔て〕ものいふこゑまゆぬく

はなたるまもなくかみて 源氏に鳴ことをはなかむといへり。さまでたらぬはなをたびくかみて。なぐけしきするは。人に哀をしらせ顔なると也

さてその左衛門の陣に 前の有がた
き物といふ奥に。「有明のいみじ
う霧渡りたる庭などにおりてあり
くを。聞召て。お前にもおきさせ
給へり上なる人は皆おりなどし
て。漸々あけもてゆく。左衛門陣
まかりて見んとてゆけばとあり。
その所を今いひ出て。其後清少の
里へいてし事をいふなるべし
さゝもんのちんへいきし朝朗 ホラク 是
も彼所の事を后宮の被仰し事也其
所の詞におまへにもおきさせ給へ
りとある首尾也其時の事おほし忘
れぬとの心也

是より后宮の清少をめしまつはす物かたり也
さてその左衛門のちん なご にいきてのち里に出てしばしあ

る ほと に、 后宮より清少を召る、御文のはしに也はし書の心也
とくまい れ りね なごおほせ事のはしに、さるも

のちんへいきし あさぼらけ うしろ なつねにおぼし めし いで

左衛門陣の朝朗をはしめかゝる禁中の御有様をいかてふり捨て里住はするそとの
らるゝ、いかでさつれなくうちふりてありしならん、いみじ

心也 うく う めでたからん 又朝朗もめでたからで清少は里すみするかと也
そこそおもひたりしかなご仰せられたる御

わたくしには 后宮さへ思召出す朝
朗を清少か私にはいかでめで侍ざ
らんと也

返 事 に、 畏也里住して宮仕を怠る恐れを申也
かしこまりのよし申て、わたくしには、いかでか

は め で た し と 思 ひ 侍 ら ざ ら ん、 御 前 に も さ り と も 中 な

物 な と の 詞 に や
る を と め と は お ぼ し め し 御 ら ん じ お は し ま し け ん と な ん

おもひ給へしと聞えさせられたれば、たち歸り 后宮よりの御詞也
いみじくおもふ

いみじくおもふべかめるなり 清少
の里居を誠によろしからず思召と
也。かの清少の畏りの由を申せ
しに答へ給ふ詞也。にくし思召に
はあらで清少を召よせんとの事
也
たがをもてふせなる 其難し参り程の
面目なき事を誰何にかけてはいひ
しそと也

べ か か め る な り、 た な か た た が を も て ふ せ な る 事 を は、
か か な る な か た た が を も て ふ せ な る 事 を は、

ることはにや
いかで「かけはし」たるそ、只今宵こまのうちによろづの事をすて

清少にまうのほれと也
「ら」れ「よ」さらすはいみじ「く」にくませ給はんとなん

よろしからんにてたに 大かたにに
くませ給はんとあるにてたにゆゝ
しくいまはしきにましていみしく
にくませ給はんとある詞をきよて
はと也

仰せご「あると」あれば、よろしからんにてだにゆゝし、ま

「い」ていみじ「く」とあるもしに「は」命も「身」いのちの大

事をも捨てまいらんとてと也
すててなんどてまいりにき

ふたんの御どきやう 中宮には春秋
に季キの御讀經ミトキヤウあれど。こゝは別に
不斷に御祈禱のためをこなはせ給
ふなるへし

しきのみざうしにおはしますころ、西のひさしに「て」ふだ

んの御どきやうあるに、佛なごかけ奉り「法師・僧」のゐたる

いふも今更めきてたふとき事と也 清少まうのほりて二日めほど也
こそさらなる「事」なれ、二日ばかりありて、ゑんのもとに

乞食也
あやしきものゝころにて、猶「そ」の「佛」の「御」おろし侍り

なんといへば、法師などの詞にや「か」まだきにはと「い」らふるを、何清少の

猶その佛供の はしめより物をこひ
たるが法師などのしはしまてとい
へと猶佛供のおろしを給はらんと
いふ也
いかてまたきには 速マタキ也佛供のお
ろしもいまたあるへき時節ならぬ
にはいかてかあらんと答る也



かりはかま 金葉集連歌にかりはかまをおしとおもふかとあり

の心也
いふにかあらんと
〔て〕たち出て見
〔れば〕、〔老・・・〕たる女

〔の〕ほうしの、いみじ
〔うく〕〔す〕けたるかりばかまの、つゝ
竹の筒

のやうに細く短き也
どかやのやうにほそくみじかきを、おびより下五寸はかりな
衣のすそみしき也

るころもどかやいふべからん、おなじやうにすけたる
かりはかまほとすけたる也

〔きぬ〕をきて、さる
〔の〕さまにていふなりけり、〔あ〕れはなに
清少の詞也

佛の御弟子にさふらへは 彼老尼の
乞食のみつからいふ也比丘比丘尼
優婆塞優婆夷を四部の弟子といふ也

事いふぞといへば、
乞食の答ふるさま也
ころひきつくるひて、佛の御弟子にさふ

此御はうちのおしみ給 前にいか
てまたきにはと法師とものいひし
事也

らへば、〔ほどけ〕のおろしたべと申すを、此御ばうたちの
御ふく

おしみ給ふといふ、
其いふこそはなやかなる也
〔かに〕みやびか也、かゝるものは
き

うちくんしたる 源氏物語に所々あ
る詞也。屈の字也。又薰の心ある
所もあり。こゝはうち埋れて花
ふしからぬ心なれば屈也

うち
〔く〕んじたるこそあはれなれ、うたてもはなや
〔かなる〕
〔きたる〕
屈の字也

かなとて、こと物はくはで、〔た〕佛の御おろしをのみくふ
清少の詞

それがさふらはねばこそとり申侍れ
こと食物なき故こそ佛供をたべと
は機嫌をとり申上たれと也

か、いとたふとき事〔か〕などいふけしきを見て、尼か詞なとかこ

と物もたべざらん、それがさふらはねばこそとり申侍れと
とつれと

いへば菓子也くだものひろきもちといふ物の類にや
ものに〔とり〕いれてと

らせたるに、よくなつきたる心也むげに中よくなりて、よろづの事〔を〕かたる、

わかき人々いできて、男やある、いづ〔事〕、にかすむなご口

おかしき事そへこと かたはらいた
き事。又とはずがたりに語りそへ
などすると也

々〔に〕とふに、おかし〔き〕事そへことなご
〔を〕すれば、うた

よるはたれとねん 尼かうたふ歌也
ほうたふや、舞まいなご
〔は〕するかととひもはてぬに、尼かうたよるは

ふ也たれと〔か〕ねん、ひたちのすけとねん、ねたるはだ〔も〕よ

し、此うたのすゑ長かりしと也これがするゑいとおほかり、是も尼かいふ事也又おとこ山の峰の紅葉みねは〔は〕

さぞ〔名〕は〔たつや〕〔と〕、かしらをまる〔か〕しふ

る、いみじくくにくければ、わらひにくみて、いねくど

いふもいとおかし、これに何とらせんといふをきかせ后宮のき

給ひて、いみじうなどかくかたはらいたき事はせさわさし

などかくかたはらいたき事はせさせ
つる 何とてかやうのうたをうたは
せしぞと也。后宮の仰せ事也

せつるそえこそきかでみをふたぎてそありつる

そのきぬひとつとらせてとくやりてよおほせ事あれはやくいなせよと也

ば、尼かきぬを取て也とりてそれ給はらするぞ、きぬすけためり

しろくてきよとてなげとらせたれば、ふしおがみてかたに

ぞうちかけてをきはまふものか、助字也誠まことにくくてみな入に

し、句のちには今日に習ひて又此尼が來たる也ならひたるにやあらん、つねに見えし

ひたちのすけとつきたり 彼うたひ
し詞につけて尼か名につけたる也
らがひてありく、やがてひたちのすけとつきたり、きぬも

いつちやりけん 后宮のとらさせ
給ひしきぬはいつくへやりしやら
んと也

しろめすおなじすつけにてあれば、いつちやり〔て〕けんな

どにくむ〔に〕、〔右〕〔左〕
前の翁丸か所にも此人あり 近の内侍のまいりたるに、かゝるも

の〔を〕 なんかたらひつけて置ためる、
かやうくにてと也 〔かう〕してつねに
〔すか〕

小兵衛といふ人 后宮の御かたの若
き女房也奥に五せちの時あかひも
のとけしも此人也

くること、〔て〕、
其あり様を也 有しやうなど、小兵衛といふ人〔して〕、
彼尼か まね

あれいかて見侍らん かれをいかて
か見候はんと也

まねをさせて也
ばせてきかせ給へ

右近内侍がことは也
〔ば、あれいかて見侍らん、かならず見せさ
ば、かれいかて見侍らん、かならず見せさ

御とくいなるりさらによもかたら
ひとらじ 其尼は后宮の御得意成け
り。此方ニ見せさせ給ふとも。此
方へはかたらひとり侍らしと内侍
の左禮ていへる詞也

せ給へ、御とくいなるりさらによもかたらひとらしなご笑
せ給へ

ふ其のち又あまなる
是は又こと尼也 〔かたわ〕のいとあてやかなる〔が〕出きた
はかたわ 〔かたわ〕

るを、又よび出てもものなご
〔い〕ふに、
ひたちが花やかなるとはか 〔は〕はづか
〔い〕

はりたる也
しけにおもひてあはれなれば、
〔れい〕の
又后宮のきぬを給へる也 〔きぬ〕一つ給はせたる

ふしおかむはされどよし かたわな
る尼なれど其さまはよかりしと也

を、ふしおがむはされどよし、扱うちなきよろこびて〔出〕ぬ
〔い〕

其のちいと久しく 常陸のすけかのかたわの尼に物かづけさせ給ふを見て。ふすべ心にて久しくまいらざるなるべし。をこがましき事をいはんとて也

るを〔はや此〕ひたちの介〔い〕きあひて見てげり、其のち

〔いと久しく〕見えねど、誰かは思ひ出ん、〔さて〕しはす

の十よ日のほごに、雪〔いとたかう〕ふりたるを、女〔房〕ども

なごして、〔ものふたにいれつ〕いとおほくをくを、おな

じくは庭にまことの山をつくらせ侍らんとて、さふらひめし

おほせ事にて 后宮の仰せといふにて侍ひめして山作れと云也

て、おほせ事にて〔と〕いへば、あつまりてつくる〔に〕殿

御きよめにまいり 主殿寮は御殿の洒掃をつとむる官人也。拾遺ニ「とのもりのとものみやづこ心あらばこの春ばかり朝きよめすな

守〔司〕の〔官〕人〔に〕て御きよめにまいりたるなごもみなより

宮つかさなど 皇后宮職の大夫亮大進少進 屬などを皆宮つかさといふ也

て、いとたか〔う〕つくりなす、宮づかさなご〔も〕まいりあつ

所のしう 藏人所衆とて廿人あり。六位の侍可然 輩 補之と職原抄にあり。禁秘抄にも委 又禁秘抄雪山の所の略ニ云所ノ衆作レ山。瀧口ノ上藤三人。所衆三人立レ庭ニ奉行ス持ニ柄振ニ云云これは禁庭の事ながら后宮の雪山つくるもなぞらへてしるべし

まりて、ことくは〔ことにつくれば、所のしう〕三四人まい

り〔た〕る殿守つかさの〔人も〕二十人はかりになりけ

の十〔五〕日まで〔は〕さふらひなんと申を、御前おまへにもえさはあ

らじとおぼ〔すめり・しめしたる〕、女房〔など〕はすべて年の内つご

もりまでも〔え〕あらしとのみ申に清少か心也十二月十餘日より正あまりとをくも申て

月十五日まで卅日はかり也
〔げ〕るかな、〔つ〕げにえしも〔さは〕あらさらん、ついたちなど

そ〔い申ふ〕へかりけると下したにはおもへど、さばれさまでなくと

〔も〕いひそめてん事かるくしくあらためじと也はとてかたうあらかひつ二十日のほどに

雨〔など〕ふれどきゆへ〔く・きやう〕もなし〔すこし〕たけそ〔すこし〕
長也雪山の高さは

〔し〕をとりもてゆくしら山のくはんをんこれき〔や〕させ給ふ

なといのるも物ぐるをしさせてその山つくりたる日〔御つかひ〕

〔式部の〕〔ぞせ〕うたゝたか〔か〕御使にてまいりたれば、

しら山のくはんをん 加賀の白山はいつも雪消ぬ所なれば念したるにや古今消果る時しなれば越路なる白山の名は雪にそありける
白山明神は延喜式神名帳には加賀國石川郡白山比咩神とあるを泰澄法師には十一面觀音と見え給へり其本地をしら山の觀音といへるなるへし
式部のぞうたゝたか 前の翁丸をうちたる藏人忠隆クニトカ同人なるべし。寛弘元年正月式部セウに任する由勘物にあり

御前のつぼにも 一條院の御前也。
禁秘抄ノ雪山の所に云事始メ大
略一條院ノ御時以後也 清少納言カ
記ニ有_リ其子細云々この所の事な
るへし

春宮 三條ノ院也。冷泉院ノ第二ノ皇
子。寛和二年七月十六日ニ春宮に
立せ給へり

弘徽殿 義子也。榮花物語ノ系圖ニ
云_リ義子一條院ノ弘徽殿ノ女御。閑
院ノ太政大臣公季公ノ女

京極殿 道長公なるべし 拾芥ニ云。
京極殿ハ土御門ノ南京極 西南北ニ
町其南一町被_レ入_ニ道長家

こゝにのみめつらしと歌 此后宮の
御方にのみと思ひしにさやうにあ
また所にもふれわたりしよとの心
を雪のふるにそへたる歌也

忠隆をかんとためし
しとねさし出し

〔て〕、物なごいふに、
けふ〔の〕雪〔の〕山〔つ

くらせ給はぬ所ななき、御前の

壺前裁なといふとおなし
つぼにもつくらせ給へ

り、春宮〔にも〕弘徽殿にもつくら〔せ給へり〕、京極殿にもつ

くらせ給へり〔けり〕なごいへば

清少の詞

こゝにのみめつらしとみる雪の山ところぐにふりにける

かな

とかたはらなる人していはすれば、
忠隆が歌を感じるさま也
たびたびかたふきて、返

しはえつかふまつりけがさじ、あざれたり、みすのまへにて

人〔々〕にをかたり侍らんとてたちいき、
助字也此歌をかたらんと也立へきしほにいふ也
忠隆歌をすくとき
歌〔は〕いみじ

〔う〕このむと〔きくものを〕、あやし、御前にきこしめして、
しと也

あざれたり 左禮の儀也これにかく
て侍る事實儀ならずと卑下の詞也
返歌えせねは退出せんとていへる
なるへし

いみしくよくと思ひつらん 至り
てよく返歌せんさなくは一向すま
しきと忠隆かおもひつらんと也

いみし〔く〕よくとぞおもひつらんとぞのたまはする、
十二月晦 つこも

日也 是又かの雪山の事也
りがたにすこしちいさくなるやうなれとなをいとたかくてあ

るに、ひるつかた縁えんに人々出るなごしたるに、
彼乞食の尼也すけひたちの介出

きたり、なごいと久〔く〕見えざりつると
〔とい〕へば、
尼か詞也 なにか

いと心うき事の侍しかは 彼かたわ
の尼に衣とらせ給ふが心うさにな
らみてまいらさりしと也
何かの給ふと也
〔は〕〔い〕心うきことの侍しかはといふに、
いかに何事

ぞととふに、猶かくおもひ侍しなりとてな
かやかによみいづ
歌は言を永すといへる心也

うらやましあしもひかれす 足もえ
ひかぬほと物とらせ給ふといふに
尼か足ひく事をいふ也

のたまふらん

と〔なん思ひ侍しと〕いふを、
嫉妬の心をにくむ也
にくみわらひて人のめも見いれ

ねは、
常陸のすけ手をうしなひて也
雪の山にのほり〔か〕つ〔ら〕ひありきていぬるの

かくなんといひやり かやうくにて目も見いれすひたちのすけをいなせたと也
なと人そへてこゝにはたまはせさりし 其ひたちの介に人そへて右近かもとへもをこせ給はれかしの心也

ちに、^右近の内侍にかくなんといひやりたれば、返事の詞也なごか

人そへて「^{こゝに}」は給はせざりし、かれが手をうしなひて雪山にかはしたなくて、雪

の山ままではあはれなると也「^{かゝり}」つたひけんこそいとかなしけれとあるを又のほり

わらふ、^{雪山也}「^{ゆき}」の「^{やま}」はきえやうて也つれなくてとしもかへりぬ、

つゐたちの日 勤物云長徳元年正月 一日乙卯雪降

つゐたちの日「^又」雪「^{のい}」おほくふりたるを、清少の心うれし

「^う」も「^又」ふりつみたるかなと「^{おもふ}」に后宮の御詞也後にふりこれはあいな

し雪はあちきなしと也「^{をば}」をきて、今の「^{をば}」かきすてよと仰せは

らる、是より又齊院より御使有し物かたり也「^{うへにて}」つほねへいとと「^う」おるれば、齊院の御使也さふらひの

おさなるもの、袖葉にやうすき直衣なるへしゆのはのごとくなるとのるきぬの袖のうへ

わなゝき出たり 是奉らんなどふる ひくいふさま也寒けなるさまなるへし

に、文也あをきかみの松につけたるをきて、さむけなるさま也わなゝき出たりそ

齊院より 選子内親王也村上天皇皇女
紹運録云號大齊院歷五代也足軒御説云選子大齊院と申は圓融院より後一條院まで五代の齊院たるに
よりて也

〔れ・〕はいつこのぞとへば、齊院よりといふにふとめてた清少の心也

〔うく〕おぼえてとりて参りぬ、また后宮御疑なりし也〔まだ〕おほのごもりたれ

ば、母屋也又本屋也〔まつ御帳に〕あたりたるみかうしをこ御隔子あけんと也〔な〕はんなど、か

ひとりねんしてあくる 清少ひとり
してはあけかたきをこらへ念して
あくる也

をしなへての心也
きよせてひとりねんじてあくるいとおもしろかたつかたなれば

〔ひ〕しめくに、后宮御目覺し也をごろかせ給ひて、いかてさやうには急きひしめく〔ことごと〕

そと也のたまはすれば、齊院より御文の〔候侍〕はんには、いかでかい

けにいととかりけり 清少はいかて
かいそき侍らざらんといふゆへに
まことに早きあけやうそやとの給
ふにや

そぎあけ侍らざらんと申に、后宮の詞也げにいととかりけりとておささ

うつち二つをうつえの 卯槌 卯杖
皆前ニ註 江次第二小書ニ曰ク漢宮

せ給へり、御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを

儀ニ云ク 正月卯ノ日以ニ桃杖ニ作ニ剛
バツヂヤウ
卯杖ニチ厭レ鬼ニ云々

うづえのさまにかしら〔つゝみ〕などして……、山たちば

な、〔ひかげ〕、山すげなごうつくしけにかざりて、文言はな御文は

れきやさせ給ふなといひし首尾也
彼本歌に「消果る時しなれば越
路なる白山の名は雪にぞありける
とよみしことく越路の雪やらん消
る氣もなしと也

の山はまことのにやしのにやあらんと見えてきえげも

なしくろ雪の日数のこりしさま也なりて見るかひもなきさまはそしたる

もけに彼年の内晦日までもあらじとのみ申せし人々に勝たる心ちすると也かちぬるこちして、いかで十五日まちつけさせん

とねんずれど、七日をだにえすぐさじと猶いへば、い

か々の猶いふ也でこれ見はてんどみな人思ふ程ににはか俄に正月三うちへ三日

にはかに三日うちへ 勅物云 入内、
事無所見 若密儀歎云々

日也后宮の参内し給ふ也
うちへいらせ給ふべし、いみしう口おしく此山のはてを

しらすなり眞實に也なん事と、まめやかにおもふほごに、こと人

もげにゆかしかりつるものをなごいふを、御后宮也まへにもお

ほせらるるに、清少の心也 十五日までといひし事也おなじくはいひあて、御らんせさせはん

とおもひつるに、かひなければ、御物のぐどもはこび、い

人もげにゆかしかりつる物をなと
清少のみならず人々も此雪山のは
てゆかりしかりし物をと也

こもりといふもの 木守山守とてあり御庭木など守る物なるへし

みしうさはかしきにあはせて、こもりといふものゝ、つる

ぢのほごにひさしさしてゐたるを、えんのもどちかくよびよ

せて、清少の木守にいひつくる詞也此雪の山いみじくもうりて、わらはへなごにふ

みちらさせすこほたせでよくまもりて十五日までさふら

めてたきろく給はせん十五日になりたらは也后宮の俸祿
あらんと也たばかりていへるにや
次に私にもとは清少の也

きろく給はせんとす、わたくしにもいみじきよろこびいはん

どすなごかたらひて、つねにだいはん所の人、げすなご

こひてにくるくた物やなにやといとおほくとらせた

れば、木守がよろこひて也うちゑみて、いとやすきこと、たしかにまもり侍ら

ん、わらはへなごそのほり侍らはんといへば、清少のことそれをせ

だいはん所の人げすなとにこひて
ダイハントコロ 臺盤所はいまの臺所也、菓子何
コヒ 角を乞とりて木守にとらせたる也

其ほともこれがうへうしろめたきまゝに清少禁中に七日まで侍ふほども此雪山の事心もとなかりしと也

すましおさめ すましは須磨の巻にひすましとある物にや細流ニいやしき女也云々。孟津抄ニ下女也。最下の物也云々。おさめは八雲抄下女也云々。須磨の巻におさめみかはやうど有。禁秘抄ニ長目御カハヤツド人カハヤツドと書り
七日の御節供のおろし 正月七日七種の御粥カユをたてまつる事也前註。こゝは后宮の御膳のすべりをおさめすましなどにもたせて木守がかたへやる也

は也
いしてきかざらんもの〔を〕は、
此わがいふ子細をいへと也
〔こと〕のよしを申せなごいひ

きかせて、
后宮の入内也
いらせ給ひぬれば七日までさふらひて出ぬ、其ほ

ごもこれがうしろめた〔きまゝ〕に、
禁中の奉公人也
おほやけびと、すまし、

おさめなごして、たえすいましめにや〔り〕、七日の〔御〕節供せく

のおろしなごを〔さへ〕や〔りた〕れば、
木守かさま也
おがみつる事なご、

すましおさめなと歸り来てわらふ也
〔かへりては〕わらひあへり、里にても〔まつ〕
夜明ると其まゝ也
あくるすなは

ちこれを大事に〔し〕て見せにやる、十日のほごに〔は五六尺〕
〔五〕日〔まつ〕

ばかり〔は〕ありといへば、うれしくお〔もふに〕、
〔ほゆ〕、〔又〕ひるも

よるもやるに〔十三〕日〔の〕夜、雨、
〔よ〕さり雨、
いみじ〔く〕ふれば、これ

にぞきえぬらんどいみじう〔くちおし〕、
〔くちおし〕、
今一日〔も〕まぢ
〔二〕日

人のおきてゆくにやかて 十四日の朝也人のおき出たるにいひつけて下女をおこさする也

一兩日をまたてきゆらん事よと也
つけでと、よるも〔ト〕おきゐて〔ト〕いひ〔ト〕なげけば、きく人〔ト〕も〔ト〕

物くるおしとわらふ、人の〔ト〕おきて〔ト〕ゆ〔ト〕くに、やがておきゐて〔ト〕いてて〔ト〕い〔ト〕

げすおこさするに、さらにおきねは〔ト〕いみし〔ト〕う〔ト〕にくみはら

だ〔ト〕ち〔ト〕れ〔ト〕ておきいでたる〔ト〕を〔ト〕やりて見すれば、わらうだ〔ト〕はか〔ト〕のほ〔ト〕

わらうだばかり いせ物語に。わらうだのおほきさしてとあり圓座也といへり。彼雪のえんざほどにてのこりしと也

詞也
り〔ト〕になりて〔ト〕侍る〔ト〕こもりいとかし〔ト〕こう〔ト〕まもりて〔ト〕わらははべ

もよせ〔ト〕でまもりて〔ト〕、あすあさてまてもさふらひぬべ〔ト〕しろく〔ト〕

く〔ト〕の祿をあらます也
給はらんと申といへば、いみじ〔ト〕う〔ト〕れしく〔ト〕いつしかあ〔ト〕

す〔ト〕にならば、い〔ト〕と〔ト〕う〔ト〕歌よみて物に入〔ト〕てまいらせんと思ふ

もいど〔ト〕心もとな〔ト〕う〔ト〕わびし〔ト〕う〔ト〕、〔ト〕また〔ト〕くらきに、〔ト〕おほ〔ト〕

きなるおり〔ト〕びづな〔ト〕もた〔ト〕せ〔ト〕て、是に〔ト〕その〔ト〕しろからん

おりひつ 折櫃也 桐壺卷におりひつ物〔ト〕ことあるをおりうづ物とよむ也

所〔ひたもの〕いれて持て来れ也〔もて〕こ、きたなげならん〔所〕〔は〕

もたせてやりつる物 彼おりひつな
と引さけてかへりたる也

かきすてゝなごいひ〔くゝめて〕やりたれば、いとどく、もた

せ〔てやり〕つる物〔を〕ひきさげて、下女の詞也雪山はなくなりし
はや〔くう〕うせ侍りにけ

といふ也 清少の心也 〔く〕、おかしうよみ出て、人にも

語りつたへさせんとうめきずんじつる歌も〔いと〕あさまし

〔うく〕かひなく〔なりぬ〕、清少詞 〔つ〕るならん〔ど〕

きのふ〔まて〕圓座ほとありし事也 〔ら〕ん物〔を〕、よのほごにきえぬ

らん事といひくんずれば、取にゆきし下女の答也 こもりが申つるは、きのふいとく

らうなるまで侍き、ろく〔を〕給はらんと思ひつる物を、〔とた

いひくんずれば イヒクツスル 云 屈也昨日ま
でありし雪の。夜の程にきえぬら
ん事。まことしからずといひつめ
たる心也。理屈リクツにいひつめし心な
るへし

まはらずなりぬる事と〕手をうちて〔申〕侍つる〔な〕とい

ひさはぐに禁中におはします后宮の御かたより也内よりおほせ事ありて、扱雪はけふまであ

りつやと清少の心のたまはせられたれば、いとねたく口おしけれはど

も、清少の返事の詞也年のうちつゐたちまでだにあらじと人々のけいし給ひ

しに、きのふの夕くれまで侍しを、いとかしこしとなんお

もひ給ふる、けふまではあまりの事になん、夜のほごに

きのふの夕くれまで侍しをいとかしこしと 十四日まで侍しは賢く申あてたると思ふとまけず口に申詞也

人のにくがりてとりすて侍にやとなんをしはかり

侍るとけいせさせ給へ清少直には后宮へ申さて御取次の人のかたへいひやる詞也ときこえさせつ、さて二十日に

いる也みを取にやりし物まいるたるにも、まづ此事を御前にてもいふ、身はなけつ

の事也おりひつふたばかり也とてふたのかぎりひきさげてもてきたりける、ぼうしの

やうにて、すなはちまうできたりしつるが、あさましか

ぼうしのやうにて 帽子にや物のふたをいたゝきてかへりたるさまなるへし

りし事、彼雪に歌へてまいらせんとおもひし事をかたる也ものゝふたにこ山雪のいろをかうつくしう雪のいろをかつくりて白き紙にう

たいみじたるともくう(ト)かきてまいらせんとせし事なごけいすれば、

いみしくわらはせ給ふ、おまへなるおまへ人々もわらふ

にか(シ)、后宮の御詞也かう心か(シ)にか(シ)いれておもひた(シ)る事をたがへた(ト)れ

ばつみうらん、まこと十四日の事也には四日の夕さり、さふらひご

かう心か(シ)にか(シ)いれて思ひける事をたかへ
たれはつみうらん 清少のかほど用
意したる事をたかへ給ひて隠し果
給は、來世の罪やうべきと也。彼
雪山のなくなりしは后宮の態取す
てさせ給ひしとかたりあらはさせ
給ふ詞也

もをやりて、とりすてさせしぞ、人のにくみてとり捨侍るにもかへり事か(シ)にいひあて

そのおきないてきて 彼雪とり捨る
時モリ木守か侘たるよしを侍共の申上
たる事をかたらせ給ふ也

やと清少の返事にいひし事也
たりし(ト)しこそいとおかしかりしか、そのおきないでき

かのよりきたらん人に 清少のたの
みをきしをさしていふ也
て、いみじう手をすりて
いひひけれぞ、后宮の御意にて取すつるそおほせ事ぞ、かのよ
いひひけれぞもおほせ事などか(シ)のさ

さらばやうちこぼたせん 此事を清
少に告たらばこのつゐちにヒサシ廂し
たる家イをこぼたせんぞと也
左近のつかさ南のつゐちの左に
近の官人雪を捨たる也イ本左近の南
つかさの南のつゐち左近の陣の南
の築地の外へ雪を捨たれ

よりきたらん人にかくきかすなさらばやうちこぼたんなど
いひて左近さ(ト)のつかさイの入の南のつゐち外也のなとにみなと(ト)りすて

て〔けり〕、いと〔たか〕くておほくなんありつ〔ど〕、い

ふなりしかばげに二十日〔まで〕もまちつけて、
〔わろくしたら
ようせず
まし〕

うへにもきこしめして 一條院も此
清少の雪山をつよくいひし事をき
こしめしけると后宮のかたらせ給
ふ也

は也 久しくきえぬ事をの給ふ詞也
〔は〕 ことしの初雪〔に〕もふりそひなまし〔ど〕、うへ

〔に〕もきこしめして、いとおもひ〔よりがたく〕あらがひた
〔やりふかく〕

〔り〕ど、殿上人〔とも〕などにもおほせられけり、さても

〔か〕の歌〔を〕かたれ、いま〔は〕かくいひあらはしつれば、
とり捨たりといひあらはした

れは清少の勝たると同前と也
おなしことかち たり、かたれ〔な〕ど、御まへに〔も〕

〔の〕たまはせ、人々ものたまへど、
清少の詞也 〔に〕せん にか、さば

き事を承りてと也
〔か〕り〔の〕事を〔うけ給はり〕ながらけいし侍らんなど、

〔まこと〕に 〔まめやかにう〕く、心うがれば、
〔うへもわた
うへもわた
うへもわた

おほくの人なめりと見つるを。年比
は大體の人と思召けるを。此雪の
日敷をいひあてたるに奇特におほ
しめすと也

おはして也
おはしたまひて、
はせ給て
まことに年ころはおほくの人なめりと
勅言也

見しつるを、これにぞあやし
くおもひしなどおほせらる

清少の心也
に、いと
うくつらくうちもなきぬべき心ちぞする、
清少

の詞也
であはれいみじき世の中ぞかし、
正月一日の雪の事也
のちにふりつみ
て侍り

し雪をうれし
くおもひしを、
侍しに、
それはあいなし
とて

げにかたせじとおぼしけるならん
まことにはじめより清少にかたす
まじきと后宮のおぼしけるならん
と主上の御詞也

かき捨よ
なごおほせごと侍し
か
と申せば、
げに
か
勅言也

たせじとおぼしけるな
らんと
て
うへもわらはせ
おは
給

します

校對
祝冊子
春曙抄

卷五

卷四

三三二

春曙抄卷五

めてたき物 見事なる也

からにしき 唐錦 蜀錦 となり
かさりだち 延喜式彈正云凡畫飭
太刀五位以上 聽之 桃華藥葉云
飭 劍 三節會。内宴。御視行幸
等王卿用之云々 むかしは二宮の
大饗にも公卿以下飭劍を用近代極
螺劍を着と江次第有
六位藏人 官位不審問答ニ六位の時
地下の者も藏人に補し候へは昇殿
禁色をゆるされ候云々

めてたきもの

からにしき かざりだち 梅檀沈香等の木像の木目也
つくくり佛のもく いろあひ 六

かく 花ぶさながくさきたる藤の 花の 松にかゝりたる 六

位の藏人 こそなをめでたけれ、いみじき君達なれど、もえ

しもき給はぬあやをりものを心にまかせてきたる、あを麴塵の

まられる六位藏人への會釋也
出る袖ぐちなど、あけくれ見しものともおぼえず、下がさね

裾也
のしりひきちらしてゑふなるはいますこしおかし
〔く〕見ゆ、
衛府藏人にて衛門兵衛など兼たる也

攝家などにて也
〔て〕づから盃〔さし〕など〔さ〕し給ふを、我心
〔ちもち〕

にも也
〔いかに〕おぼゆらん、いみじう〔く〕かしこまり、
日比地下にてありし間一所

肥も居す畏たる人々にも藏人に成ては同しやうにつれありくと也
ちにあし家の〔こころ〕君たちをも〔けしき〕ばかりこそ
〔ようい〕

し、かしこまりたれ、おなじやうに〔うち〕つれ〔たち〕あり

く〔夜〕天子の藏人をめしつかはせ給也
〔を〕さまなど見る
〔に〕は

は、ねたくさへこそおぼゆれ、
〔御文か〕せ給へば、御す、
帝御書か、せ給ふ也
藏人也

りのすみすり、
〔な〕わ
暑き比侍臣など帝をあふき申さるれば藏人御團扇給りてあふ
御うちはなごまいり給へば、
れつかふ

く也
まつる〔に〕
六位藏人にて侍るほと也
みとせよとせ〔ばかり〕のほごを、なりあし

からふりえておりに事近く 六位藏
人巡 爵とて五位に叙して。藏
人をさりて。地下におるゝ事也前
註

く、物のいろよろし大かたなる心也六位藏人にてあるはとは衣裳なときらくしく
くくてまじろはんはいふかひなきこも

てましらへかしと也
のなり、かうふりえておりにことの期のなりておるへき程のちかくな

らんにだに、地下になりては御前へまいる事もなくなれば也古今に命に
いのちよりはまさりておしかるべき事をも

もまさりておしくある物はとよめる詞也
其のりんしの所々の御たまはりなご申てまごひけるこそ口
おるるこそいふか

おしけれ昔の藏人はこそしの春夏よりこそなき
ひなくおほゆれ

其御たまはりなと申て 御給也巡爵
のゝち受領など申す事也

たちけれ今の世にははしりくらへをなんする
今はむかしのやうにはなき心也

博士の才智ある也花鳥云博士は博達之士といふ事也
はかせのさへあるはいとめでたしといふもをろかなり、かほ

【もいと】にくげに【いと】げらうなれど【も世に】やんことなき
才智ゆへに世にた

【物におもはれ、かしこき】御前にちかづきまいり、さるべ
ふとまるゝ也 禁裏春宮などをさしていふ也

き事などはせ給【て】御文の師にてさふらふは【うらやまし

はかせのさへある 儒家に紀傳明ッ
經などあり。環萃云ッ明經道
は十三經を以家業とす。紀傳道は
三史史記漢書後漢書文選等を家業
とす
下らふなれとも 官位ひきき事也。
文章博士は從五位下。大學博
士は正六位下の相當也。官位令に
あり

御ふみの師にて 帝の御師範也御侍
讀とて候する也。禁秘抄云ッ紀
傳御侍讀能々可有清撰一世之所
許明書也

順文 御祈禱追善等にかく文也本朝
文粹菅家文章などに願文數多有

く・めでた^く・しど^とこそおほゆれ、願文^{はんもん}も、さるべきもの
表^{へう}・

序^{じよ}詩序^{しじよ}など也 つくり出してほめらるゝ^い・いとめでたし 法師

のざへある^は・^た・^すべていふべ^きに^あらず、^持經者^の

ひとりしてよむよりも、あまたが中にて、^{晨朝日中などに經よむ事}時^なごさだまりた

也^讀經^也も 御^ごときやう^なごに、^{才ある法師は猶と也}なをいとめてたき也、くらうなりてい

いづら御ときやうあふらをし

らくて人はよみやみたるに才ある
法師はそらに覺えて一人讀誦^{トツシユ}する也

后のひるのきやうけい 晝^{ヒル}行啓^{ケイ}春
宮后宮の御ありきを行啓といふ也
みやはじめのさほうしく 立后の左

法禁中のごとく^{コウ}狛犬^{コウ}大床子^{コウ}などし
つらふ事也。こゝは定子の皇后宮
に立給ひしはじめの左法しき事に
や。正暦元年六月一日なるべし榮

花物語か、やく藤壺^{ツボ}の巻に。上東
門院立后の所云^{ツボ}此たびは藤壺
の御しつらひ大床子たて。御帳の
前のこま犬なども常の事ながらめ
とまりたり云々

内膳^{ないぜん}へついわたり奉^{ほう}り 百寮訓要
云。内膳司天子の供御^{くご}を奉行する
所也。たとへば膳部所など申所同
事也昔は内膳の御飯^{ごひ}ならでは主上
はきこしめさぬ事也。をよそもろ
くの御膳の具^ぐは。此所にをかる

たれなどいふ心也 灯明をそしとの心也
づら御ときやうあふらをしなごといひてよみやみたるほど

しのびやかにつゞけらるよ^さ后^きのひるのきやうけい^は御^ごうぶ

の御産也 左法がましき心也 御膳をすゆる物也桐壺巻
や みやはじめのさほうしく、こまいぬ大しやうじなごもて

に大床子のおもの^{とあり}とあり 御ちやうのまへにしつらひすへ、内膳御^{ないぜん}へついわ

飯のため也 句 したてまつりなごしたる、ひめきみなど聞えした人^{入内巳前の其人}ごこ

云々。立后有ては禁中の義式をう
つすさまなるへし

とも見えず嚴重なると也
そ露見えさせ給はね

攝政關白を申也
一の人の御ありき

藤原の祖神なれば必一の
春日まうて 忍ひ

人參詣ある事也
ぞめのをりもの、

蒲萄染は紫なるにつけて也
すへて紫なるはなにもくめでたくこそ
ひろき庭に雪のあつくふりしきたる
すへてなにもく紫なるものはめてたく

あれ・あれ・あれ
こそあれ

花糸紙何も紫よしと也 句
花もいともかみも、

すへてなにもくむらさき
庭に雪のあつくふりしきた

なるものはめてたくこそあれ
一人の人

むらさきの花の中に「は」か

きつはたぞすこしにくき、

花の形を云也是も色はにくからぬと也
いろはめでたし、

六位藏人の宿直姿也
六位のどのる

すかたのおかしき「に」

禁色をゆるゆへにと也
もむらさきのゆへ

「なめ」り「ひろき庭
な」

今上一の宮 キンシヤウイチノ 一條院の第

一の皇子敦康親王の御事にや。御

母ハ后宮定子なれば御淑父に内大

臣伊周中納言隆家卿など上達部あ

に雪のふりしきたる

今上一のみやまだわらはにておはしま

すが御おちに上達部かんたちめなどのわかやかにきよげなるにいだかれ

させ給ひて、殿上人てんじやうびとなごめしつかひ、御馬おほんまひかせて御覽ごらんじあ

そばせ給へる、思ふ事おはせじと覺おぼる

なまめかしき物 優美なる心也

なまめかしきもの

きんたち 公達とは攝家の子息清華
などを申也

ほそやかにきよげなる「きん」だちのなをすかた おかし
直衣きたる姿也

うへのはかま 表袴

げなる「童女・」のうへのはかまなごわざと「に」はあらで、
わらわめ とうによ とう女(ト)

ほころびがちなるかさみばかりきて、
汗衫前註 「うつち」くすだまなご
うつちくすたまなご

ながくつけて、
高欄也らんかん也 「など」にあふぎさしかくして
顔にさしかさしたる也

夏のきちやう 几帳の帷夏は生
を用したうちかけてとは几帳のか
たひらのすそを帳臺にうちかけた
る也

ゐたる 「わかき人のおかしげなる、夏のきちやうのしたうち
若き女房也

かけて、
かの女房の着たる物也 「うつち」くすだまなご
しろきあやふたあひ引かさねて、手ならひしたる

うすやうのさうし、
薄様にて書し草紙也 村濃 「むらごの糸しておかしくどちたる」柳の

もえ「出」たるに、青きうすやうにかきたる文つけたる「ひげ
イもえ出たる

ひけこのおかしうそめたる 髻籠の
竹を繪の具などにてそめて五葉の
松にゆひつけし也
みえかさねのあふき 河海抄ニ云ッ
檜扇の兩方の上三重づゝ薄様に
つゝみて。色々の糸にてとちて。
あはひむすびにしてきたる也。
五重もおなじ風情なり

このおかしうそめたる、五えふの枝につけたる「みえがさね
三重

のあふぎ五重いづえはあまりあつくなりて、厚也もごなごにくげ也、檜扇の手もと也

〔よくしたるひわりこ檜破子也 しろきくみのほそき組糸のほそき也〕いどあた

しくもなくていたくうものふりてもなき檜皮屋也ひはだのふき

の屋になかきさうぶをうるはしくうふきわたしたる葺蒲

あをやかなるみすのしたより、きちようのくちきがたイ几丁のくちき

くちきがたの 冬の几帳の繪也禁秘抄清涼殿の所にいはく四面ニ有ニ几帳ニ惟夏ハ生以ニ胡粉ニ畫ニ葦雀ニ冬ハ朽木形云々

かたのトアリ可用のあさやかにひもいとつやくかにてかゝりたる、ひもの

〔風にふきなびかされたる〕もいどおかし夏のしろきくみ

のほそきもかうのあさやかなるすのどのかうらんのわ籬の外也

たりにいどおかしげなるねこのあかきくびつなに白き

いかりのを 猫の綱に碓ツトイカリをつけて物にかけて猫を引とめんとしたる也其緒を猫の食ひ左禮たるさま也

名たと書て札付しにやいかりのをくひつきてひきありくもなまめひたむらこのつななかう引てはかりのをくみのなりいかりのをくみのなかきなどつけてひきありく

五月のせちのあやめの藏人 五月五日の節に内侍女藏人續命縷を群臣に給ふと花鳥餘情にあり前註是をあやめの藏人といふにやあかひもの色にはあらぬ 赤紐は五

節などの時紗をたゝみてあふひむすびをして泥繪など書て。右の肩に二筋つくる事あり。菖蒲のかづらは其あかひもの色ならであをきをいふ也

ひれくたいなどして 領布 裙帶也

順カ和名ニ云領巾 日本紀ノ私記ニ云

比禮 婦人ノ項上ノ飾也 裙帶

和名云 白氏文集云 青羅ノ裙帶 裙帶 此間ニ云ク如レ字ノ

り・・・ひきなきありくもおかしうなまめきたる
もおかしう・・・
五月の

せちのあやめの藏人、さうぶのかづらあかひもの色に

はあらぬを、ひれくたいなして、くすだまをみこ

たちかんだちめ「なご」のたちなみ給へるに奉るもいみ

じうなまめかし、とりてこしにひきつけ、ぶたうしは

ひとりわらは 五節の舞姫まいる

時薫爐をもつ童女也。江次第第十云

舞姫等次第参入。先童女一人持

火取次童女一人持茵 五節帳臺

試 并御前試の所にもあり

をみの君達 是豊明の節會に小

忌衣着したる君達也。江次第

に小忌王卿。小忌大夫などいへ

るこれ也。幻の卷五せちの比の

所に頭ノ中將藏人ノ少將などをみ

にあをずりのすがたきよげにめやすくてとあり。河海ニ云ク小忌青摺山藍摺也。花鳥ニ云ク十一月中ノ卯ノ日新嘗會ノ辰

日ノ豊明 節會には。山あゐにてする小忌といふ物を着する也。一代一度の大嘗會にもかくのごとし云々

りんじのまつりの舞人 賀茂八幡などの臨時の祭に舞人あり前註江次第等ニ委

五せちのわらは 五節の舞妓の童也。善相公ノ異見ニ曰。五節ノ舞妓者大嘗會ノ時ハ五人。皆預叙位。其後年々ノ新嘗會

時ハ四人。又曰擇良家ノ女ノ未嫁者置テ爲ニ五節ノ妓ニ云々

宮の五せち出させ給ふに 后宮定子 宮の五せち出させ給ふに、かしづき十二人、ことどころには

いし給ふもいと「おかし」ひどりのわらは・・・

かき藤に付たる をみの君だちもいとなまめかし 六位藏人

あをいろのどの井すがた りんじのまつりの舞人 五節のわ

らはなまめかし

閣ノ宗祇に御傳授の大嘗會の説ニ云。小忌といふは神事の衣服也。白き布を張て。山あゝといふ草にて榎木を摺る物也。大かた狩衣のごとし云々。こゝには白き絹とあり。女房の服には絹を用るにや

に、わらはは、
〔まいて〕〔いま〕すこしなまめきたり、下づかへ

次第に上りあり十二人のかしづきにや
〔かんだちめ殿上人〕を隠してし給へは也ごろき興

じて、
小忌の君達といふになぞらへて名付たるなるへし
をみの女ばうとつけ〔たり〕

をみのき〔ん〕だちはと外也にゐて、もの〔いひなごす〕、五せち

のつぼねを〔日もくれぬ程に〕みなこぼちすかして、〔たいと

五せちのつぼねをみなこぼちすかして辰日の儀式事はてゝの事なるへし

其夜まではなをうるはしくこそあらめとのたまはせて 此儀式を猶あかずおぼす故に。扇などこぼちても。猶夜る迄は舞妓のさまやつさでうるはしくてあれとて。さもいたくしなさせ給はぬと也。后宮の御はからひなるへし

舞妓ともを也
あやし〔く〕てあらする、いとことやう〔なる事〕なり、其夜

まてはなをうるはしく〔なから〕こそあらめとのたまはせて、

さもまごはさず、きちやうごものほころびゆひつ、こぼれ出

るへし、小兵衛といふが、是后宮の女房也。前に常陸介が事を右近ノ内侍にまねばせし人也。かしづき十人の内にや

さねかたの中將 勘物ニ云ク實方正暦
二年九月右中將 元右馬頭 五年九月
八日左中將

ばやといへば、さねかたの中將よりてつくろふにたゞならず

あし引の山井の歌 足引は山の枕詞也。我思ひのむすぼゝれたるを山井の氷にそへたり。下ノ句は彼赤紐のとけしを。氷をひもといふによせてよめり。此歌後拾遺集ノ雜ノ五に實方の歌也。彼集にては雜のうたなれど。此草紙にはたゞならずとあれば戀にや

實方の歌也
あし引の山井の水はこほれるをいかなるひものどくるなる

らん

といひかく、小兵衛が事也年わかき人のさるけ顯證あらはに暗かましき所なればはそうのほごなれはい

つかしきにやとの心也
ひにくきにやあらん返しもせず、そのかたはらなる

おとなしき女はうだち也
おきな人たちもたたうちすてくしつごもかくもいは

へぬ也 中宮大夫以下の宮司也
ぬを、みやつかさなどはみゝごめてきゝけるに、返歌なくて笑くうな

止きに人の見ぬかたより入て清少などに返歌を宮司のそゝのかす也
りにけるかたはらいたさにことかたよりいりて、女ばけな

うのもとによりて、宮司の詞也いかてかく返歌し給はぬそと也なごかうはおはするそなごぞさゝめく

なるに、よたり四人ばかりをへだてゝゐたればよく思ひえたらう

んにてもいひにくし、まいて歌よむとしりたらん人の

四人ヨダリばかりをへだてゝゐたれば 清少は小兵衛とのあはひ四人ほど隔てたれば。たとひよき返歌を思ひえたりとても人をさしこえては返歌いひにくしと也
歌よむとしりたらん人の 歌よみと知たる實方の。大かたならぬ此歌には。いかでか卒爾ソツツに返歌すべきと清少もつゝましく憶せしこそ折節ワわろけれと也

大かたならぬうたにはと也 にはといふ心也
おほろけならざらんは、いかでかどつゝましきこそは

わろけれ、よむ人はさやはある、いとめでたからねど、
〔ねた〕

ふとこそ〔はいへど〕、つまはじきをし〔て〕ありく〔も〕、いと
〔うちいへ〕、〔か〕

おかしければ

清少返歌千載集にはうはごほりあはにとあり
うす 〔うす〕ごほりあはにむすべるひもなればかざす日かげに
うはは 〔うはは〕

よむ人はさやはある 歌よむ人はさ
やうに返歌せずやはあらんとはげ
ますことば也
いとめでたからねど たとひめでた
からぬ歌にも返歌せぬは妬くある
とこそいふ習ひなれ。まして是程
の歌に返し給はぬはいかゞとは
ぢしめはげます也
つまはじきをして 人を拒み恥しむ
るさま也。帚木巻にむくつけき事
とつまはじきをしてとあり。空蟬
巻にもあり
うす氷あはに歌 彼實方の山井は氷
るに。いかでとくる紐ぞととがめ
しをうけて。淡にむすへるはかな
き氷なれば日影にゆるひとくるぞ

と理りたる也、是も紐に氷をそへ。
日陰のかづらを日の影にそへた
り。此歌千載集にはうは氷とあり
尤可然也。とまりも斗そとあり畢
竟同心なるへし

とくる心也 千載にはぞトアリ
ゆるふばかりを

是も后宫の女房也
と辨のおとゞ といふにつたへさすれば、
きえいりつゝえも

いひやら〔ず〕、〔なごか〕、〔なにごか〕
〔ねは〕、〔なごか〕、〔なにごか〕
宮司えきかね也又實方の聞とり給はぬにてもあらんにや
とみゝをかたふけてとふ

に、すこしことどもりする人の、いみじうつくろひ、めでた
こゑをつくるふ也

しときかせんと思ひければ、えもいひつゝ
〔えもいひつゝ〕けすなりぬる
かの返歌を

ことどもりする人 癡コト、モリ 法華
經譬喩品云若得爲二人輩 盲
瘖、癡、一、斯、二、故、獲、罪、如
カク、
レ是、中、略

おりのぼるをくりなどに 五節の帳タイコイロミ臺の試。御前の試などに下り上る其送りに。或は所勞など申入し女房をも。后宮の懇にの給ひしかば。各のこらず群立て女房おほくあまりうるさきまで有しと也

よくいひきかせきりしは清少のはちをかくすなりしと卑下の詞也
こそ、中にはぢかくす心ちしてよかりしか、おりの

ぼるをくりなどに、なやましといひていかぬる人をも

后宮の仰せつけられしかはと也
の給はせしかば、あるかぎりつむれたちて、こと所の五節に似すとことにもにす、あ

也
まりこそうるさげなめれまひびめはすけまさのむまの

かみのむすめ、そめごの、式部卿の宮のうへの御おとうと

そめとの、式部卿 紹運録ニ村上天皇の皇子爲平親王を染殿、式部卿と號す云々

はての夜もをひかづきいくにもさはがず 助正のむすめの十二歳なるをオヒ負かづき打つれ行にも。うちしづまりておとなしくおかしき人と也はての夜とは辰日節會の時にや但卯日童御覽の事にや。公事根源に卯日は童御覽す清涼殿に召て御覽す云々

是后宮の五節助正のむすめの母也 助正の女也 容儀なとほむる也
の四のきみの御はら十二にていとおかしげなりき、はての

夜もをひかづきいくもさはがずやがてじう殿よりとを

りて、清涼殿のおまへのひんがしのすのこより、まひ

姫をさきにてうへの御つほねへまいりしほごおかしか

り

ほそだちのひらを ホソダチヒラヲ 細劍平緒此一節
と次の段も五節の事に連続せず。
只なまめかしき物をいふなるへし

ほそだちの〔に〕ひらをつけて、きよげなるおのこのもてわたる

も〔いと〕なまめかし 紫紙の文なるへし 〔むらさきのかみをつゝみてふんじてふ〕
封也

さながき藤につけたるもいとおかし 是より又五節の事を立かへ 〔だいら〕は五節の〔こほ〕
〔うち〕

りいふ也 こそすゞろに只な〔ら〕で 見る・ 人もおかしうおぼゆれ
見ゆる

そのも〔り〕づかさなどの、色々のさい 細工せし物にや 物思つけたるやう
〔て〕を、ものいみのや

とのもりづかさなどのいろいろのさ
いくを 雲圖抄ノ裏書に 御前の試み
の夜。主殿の官人庭中に 列立
炬火を舉る事あり。又辰日の節
會に。舞姫參上シテ於ニ第三間ニ列
舞。主殿 女孀四人 乗レ燭照
マヒテ 舞云々。此時主殿の女孀の出立
にさやうの事あるなるべし。未レ及
ニ簡見ニ追而可レ考

にせしにや 彩色付たるにや 〔う〕に さる 〔しき〕つけたるなごもめづらし うく 見ゆ、
〔せせ〕

涼・殿のそりはしに 髻村濃 女孀などのさまなるへし もとゆひのむらごいとけざやかにて
うえう
んよう

うへさうしわらはへ 上雜仕童にや
いでゐたるも、さまざまにつけておかしうのみ そある 〔う〕

いみしき色ふしと 五節の比の事を
面白き事に思ふさま也 へ 〔の〕 ざうし 〔人のもとなる〕 わらはべ 〔ご〕も、いみじき色ふ

山ある日かけなど 山藍にてすれる
物や。日蔭の糸など。五節の用意
に柳宮にいれありくにや しとおもひたる 〔いと〕 ことはり也、山 あ 〔あ〕 る 日かげなどや

舞あり。ひんたゝらなどうたふ。
大歌小歌などいふ事あり 下略 猶
江次第委。圖は雲圖抄にあり
行事の藏人いときびしうもてなして

物見る人などの亂入を禁ずるさま
也。江次第ノ帳臺ノ試ニ云ク藏人頭
行事藏人立ニ舞殿東戸下ニ開闔舞間
禁ニ亂入ニ理髮童女陪從下仕之外不
レ可レ入。頭若ノ行事ノ藏人之外不
レ能レ伺ニ戸外ニ上下略
かいつくろひ二人 五節のかしづき
のたぐひ也。後拾遺の詞書に一條
院ノ御時。皇后宮五節奉り給ひけ
るに。かいつくろひつかうまつり
ける人の。つけて侍けるあか紐の
とけて云々。これ江次第に理髮一
人とある物なるへし
猶これひとりなどの給ふ 殿上人
の物見る人を具しきたりて。是一
人はいれよと侘るさまなり

人〔の〕いときびしうもてなして、かいつくろひ二人〔の〕

是江次第にいへる童女なるへし 薫爐菌なと持もの也
わらはよりほか〔に〕は〔すへて〕いるまじと〔戸を〕をさへて、

お〔も〕に〔くき〕までいへば、殿上人など〔も〕、猶これひとり

〔ばかり〕はなごのたまふ〔を〕、うらやみあり〔て〕、いかでか

かて一人もゆるさんと也 后宮也
なごかたくいふに、宮の〔御かたの〕女房〔の〕二十人ばかり

ことしくいひつる藏人。殿上
人などにはきびしくいひし藏人の
后宮の御かたの人々には何ともえ
いはざりしと也

押凝てさゝめきいれはとつゞけて見るへし
〔を〕しこりて、ことしくいひたる 藏人〔を〕
后宮の御威光を
なにごもせ

をそるゝ也
ず、戸ををしあけてざ〔を〕めきいれば、あきれて、いごこは
藏人がさま也 是は也

すちなき世かなとてたてるもおかし、それにつ〔き〕てぞ、
〔け〕

かしづきともみないるけしきいとねたけなり、主上一條院也
〔に〕

もおはしまして、〔いと〕おかしと御覽じおはしますらんか
こらん

卯日童御覽の夜の事にや
し、
「わらはまひの夜はいとおかし」、
「どうだいにむかひ」
て。

ね・
〔たるかほごも〕
〔も〕
〔いと〕
〔らうたげ〕
〔におかしかりき〕
〔なり〕

むみやうといふひはの御ことを、うへのもてわたらせ給へる

〔を〕、見などしてかきならしなごすといへば、引にはあら

〔に〕

〔す〕をなごをてまさぐりにして、これが名よ、いかに〔どか〕
〔かど〕

むみやうといふひはの無名拾芥ニ
云々上東門院ノ名物也或説ニ蟬丸ノ
琵琶。上東門院令レ坐ニ濟時亭ニ
之時爲ニ同祿ノ燒失畢。愚案せみ丸
のといふ説もあれば。むかしより
禁中に有しゆへ。定子の御方へも
もてわたらせ給へるなるへし。さ
てのち上東門院の名物とはなれる
にや

〔やなご〕きこえさするにたゝいとほかなくもなしとのたま

はせたるは、
無名と名をのたま
はんよりは猶と也
猶いごめでた
〔く〕こそ覺えしか

しげいしやなごわたり給ひて御物語のつゐでに、
しげいさの
まろがも

詞也
とにいとおかしげなるさうのふえこそあれ、
ことこのゝえさせ

給へり〔し〕との給ふを、僧都のきみ〔の〕、
僧都の詞也
それはりうえんにた
我に

ことこのゝえさせ給へり故殿とはか
くれ給へる父君の御事也。中關白
のしげいさへまいらさせ給也
僧都のきみ勅物ニ云々隆圓隆家兄
弟正暦四年權少僧都五不レ經ニ律
師。寛弘八年四月權大僧都二長和
四年二月卒七

しげいさ 淑景舍女御也后宮の御い
もうと也